

彼の友人の日記から引用する。

『奴は顔を輝かせた。こういった。

「たとえば、こういうテーズがある。

クサラッサ ウバサムバダー

よいことをなし

サッバーバッサ アカラナム

悪しきことをなすなし

だれもが一度は聴く言葉、また猜疑を抱かずにいられない言葉だ。古代からこの道德律がなぜ不変かを不思議とするのは当然だよ。

だが君はいうかもしれない。昔の人たちは素朴だから信じられたのさ、いまの人たちはそれを信じてはいない、なんの得にもならないからさ、ってね。だがそうだろうか。こんな道德を守ったって現実的な利益がないことは、古代の人間の方がよく知っていたんじゃないか。彼らは過酷な時代を、残虐が群れを做す野蛮で不安定な社会を生き抜かなければならなかった。庶民は人でないかの如く踏みにじられていた。自分一人を守れぬばかりか、家族をも危うくしかねない論理を、どうして遵守できようか。

だからそうじゃないんだよ。過去を愚かしく思うのは後代の驕りさ。そっちこそが蒙昧な迷信なんだ。

昔の人々だってけてして道德に従ってばかりいたわけじゃない。だが信奉すべき理念として、それは生き続けた。どうして棄てられ、忘れ去られなかったのか。そもそもどうしてそんな倫理があり得たのか。実践で役に立たぬ理念を継承し続ける余裕なんかはなかったはずだ」

そういつてから言葉をとめ、眉を少し顰めて眼窩を翳す。双眸が遠くを眺め遣るように霞がかった。

「そう、遺伝子の血脈に受け継がれた記憶を想い出そうじゃないか。

さあ、もう一度考えてくれ。

よい行いとはなんだろう。善行と呼ばれるものの本質を捉えるためには、世間一般において善いとされる行為に共通する事項を探ればいい。あらゆるよき行いに必ず備わる事項があれば、それが善行の本質だと考えられる。

僕は思う。よいとされる行為を閲すれば常に見出せるものは、自分という立場に囚われていないということだ。逆に悪い行いはすべて自分という立場に囚われて為されている。

つまりよい行いとは自己超越的で、自分自身の欲得を脱した行いのことだ。欲望を捨てよ、敵を愛せよ、つてぐあいにね。

だがなぜだろう？ 僕はただ物的法則の世界で、物理的な制限以外には自由であるはずなのに、なぜそんな規律に束縛されなければならないのか。君はそう思ったことがないかい？ だが僕にいわせれば、それは愚問だ。

この宇宙がただ物理的な延長による時空であるならば、この中でありとあらゆる選択肢が可能はずなのに、なぜ欲望を汚れとし、他者を慈しむことが優れた道徳としていにしてより人々に知られ、世界のどこにおいても普遍的に選択されたのか、僕にはわかっていない。生まれ持った叡智によって、僕はその理由を知っているんだ。実に簡単なことなんだよ。素朴で力強く、動かしがたく晰らかな理由なんだ。一切の存在の生成の起源にも遡れる決定的必然性だ。

そしてもしそれが達せられたならば、僕は天国に生まれ変わる。びっくりしなくてもいい。当然の、自明なことなんだ。

だが君、生まれ変わるといったって、あの世でのことじゃない。死んでから生まれ変わるんじゃない。いまここで、今生で、生まれ変わるのさ、天国にね」

眼窩を翳していたあの奇妙なたちの眉毛を開くと瑪瑙石みたいな虹彩が不可読の聖文字にも見えるふたつの瞳で、一瞬だけおれの眼をじっと見つめてから贅沢なお世辞でもいったかのようにゆったりと微笑する。

「僕がまともじゃないとでも思うかい。ふふん。ばかばかしいよね。いや、君の考えがさ。なにもわかっていないんだ。いいかい、これは現実の話だ。疑いようもない。突拍子もないことを僕はいつているんじゃない。エクスターゼによって僕は天国に生まれ変わるんだ。いわば、解脱だ。

驚いているのか。いや、呆れているんだろう。だが君はただ思い込みの中を生きている。ほんとうのことをなにも知らない。現実が見えていない。眼を蔽われている。現実には実体なんかないんだ。

モジュラー式装甲戦闘車輛メルカバ Mk3 Baz のような鉄壁不動であると君たちがいつて止まない現実性とやらが、実は蜥蜴の背の青っぽい玉虫色みたいなもんだといとも簡単に僕は証明できるよ。

いいかい、たしかに現実はまだしく現実さ。たとえ夢でさえもね。だがそれは幻影肢みたいなものなんだ。ほら、知っているだろう。手足の一部を失った人が、その失ったはずの部分に痛みや痒みなどを感じるという、あれさ。人間にとって切実でありながらそういうものって、結構あるんだよ。たとえば満腹感を実際の満腹の数分後、もしくは十数分後

に訪れるけれど、これなんかもその例の一つさ。

僕らにとって極限的切実ともいえる痛みや快樂でさえ、そうなんだ。

だが現実が痛くも痒くもないものだなんて驕慢なことをいうつもりはさらさらない。幻影であつたとしても、飲びは飲びだし、苦しみは現に苦しい。切実さにはなんら変わりがないことは、むしろ、よく知っている。君らと同じにね。

現実^{エクスターゼ}は現実さ。その現実性で、猛威を振るっている。だが絶対の王権ではない。僕がいたいのは、それだ。すべては^{エクスターゼ}Ekstaseのために、^{エクスターゼ}脱自態こそが存在の、存在たる真実なんだ。

いったい、自分自身を超え出る、^{エクスタシス}脱自以外のなにを以て真実といえるだろうか。人間に限らず、一切の存在者はより高度なエクスタシスを求め、より超越的な^{エクスターゼ}脱自態たらんと志向する。

僕は宇宙開闢のビッグバンさえもエクスターゼだと思う。真空エネルギーによって拡大を加速させ続けていることが自己超越の運動だと思う。

生命もまた無機物から構成されているが、生命であることを做している。これもエクスターゼだ。哺乳類が爬虫類の部分を脳幹に残し、その本能に支えられながら、哺乳類として機能し続けることもまたエクスターゼだ。人間が自己の主観的な考えを超越し、客観的な立場を維持し続けようと努めることもまた自殻を破って達したエクスターゼさ。

同様に自分という立場に囚われない自己超越的な考え、損得を超えた行為、喪うことを怖れず、嘆かず、欲望を捨て、敵をも愛することもエクスターゼだ。だからこの道德律は全宇宙に一貫する運動の一環であり、絶対的な根拠を有しているんだ」

奴は（いつもそうなのだが）演技っぽく見える演技で瞑想の表情を造る。

「つまり日常の価値観は顛倒している。皆自分の正当な利益を守ることは正義だと考える。ではなぜイエス・キリストは右頬打たれたならば左を差し出せといったのか。無辜の死は悲惨なる絶命なのか。だが武士道は死にすべしという気魄がさわやかな潔白と感ぜられるのはなぜだろうか。

僕らの価値観は逆さまなんだ。欲し求めるもの、価値があると考ええるもの、すなわち僕らにとって有為と思われることの一切は、僕らの本欲に異逆している。実践的な問題としては、無為が有為で、有為が無為なんだ。これはリアリズムであって絵空事ではない。人には信じられないだろう、愛の成就や栄光ある名譽や偉大なる事業の成功が無為で、横変死さえも有為な人生の終たとはね。僕らは欺かれ、異逆を愛執させられているから、僕ら

自身の欲が見えていないのだ」

いたるの奴、柔らかな髪を揺らし、また微笑みやがった』

最初、この文を読んだときには、思わずページを閉じ、その冊子を抱くように両手で胸の上に抑え、しばし仰ぐように上を向いて目をつぶったものである。人には愚かしいとは思えないであろう言説も私には偉大な教祖の聖句の如しだ。この日記の発見は私の『^{いたる}イ多し』研究の転機となった。イ多し、本名^{いさや}斐韜^{いさや}いたる、の生地、^{まがみ}真神郡^{ほむら}畝邨村を渉獵し、その夏に見つけた。

当地を訪れた三回目であった。彼のことを知ってから一ヶ月とは経っていないかったときであることを考えると、素人研究家が専門家に無価値とされ、世間一般からは忘却された作家の調査をするには憑かれていたようだと思う。

坂本通りと呼ばれる、雑貨屋と酒屋しかない、七、八軒の家並みだけの村の中心地歩き、店先の人などと二、三の言葉を交わしていた。

「あれ、こないだ来た若いのが、また来たんかい。大学へは行かんのか」

「お爺さん、私は学生じゃありません。大学なんか行きたいと思ったことはありません」

「仕事もせんで」

「していますよ、休暇でここに来ているんです。私はね、趣味で斐韜いたるのことを調べている、前にもそういったじゃありませんか」

「そうなんか。」

ほんとにまあ、もの好きなお方じゃ。なあ、死んだもののこたあ、どうこういたかあねえがね、奴ア、まっこと、いけすかんガキじゃったよ」

奥から婆さんも出て来た。

「はあ、ちっちゃえときから、おかしなこぼっかりいいおったらしいよ、孫の紗代香^{さよか}が同級でな、よういっとった」

「お孫さんが同学年ですか。前に来たときは教えてくれなかった。友人関係って奴ですね、そうか、思いつかなかった。いや、あたりまえなことそ気がつかないものさ。いえ、独り言ですよ。そんなことより彼の友だちがまだこの辺に住んでいませんかね」

「さあなあ。友だちなんておったかなあ」

道で出会う人に片っ端から同じことを訊く。といっても人通りなどないに等しいので、軽トラックやトラクターまで停めた。畑仕事をしている人にも大声で話しかけて作業を止めさせる。

イ多しは年少から既に変わり者だったらしく、だれの印象もよくない。聞かされる言葉は同じだった。ならどういふ風にいやだったのかを訊こうとすると顔を曇められる。具体的に尋ねられても、いうことがないのだ。ただ態度がとか、もののいい方がとか、抽象的でしかない。それ以上訊くと面倒臭そうに首を振られる。

そうこうして目の前にしたのは筆をかついだ農婦だった。真上に達した日差しが雲に翳される。

「そういやあ、よく奴ア遊んどったの、あのせがれといっしょに」

「だれとですか」

「ばみ^たた
「叭ら蜜太じゃ」

「ばらみた？」

私は考えをめぐらせた。イ多しの構築した空想世界に、そんな名を持つ登場人物がいただろうか。記憶になかった。この人はおかしいのではないかと思う。

「おうじゃとも。叭ら蜜太さ。じょおがんなさんのな、せがれじゃった」

「人の名まえですか。変わってますね」

「そうさな。お経（ひわだぶき摩訶般若波羅蜜多心経）にあやかったんじゃ」

午後には、ひわだぶき松皮尊のひさしまぶかい貞観正國寺を訪れた。イ多しとよく行動をともにしていたかつての少年が、寺の一人息子だとわかったからである。叭ら蜜太は不在だった。会社を辞めて欧州を長期旅行中という。

私は自分が来訪した主旨を彼の父住職に託し、連絡先を残して気長に待った。一週間後に叭ら蜜太本人から国際電話があり、いまミラノにいるが斐韜いたるについて知りたいなら、彼との交遊を洩らさず詳細に記録した日記があるから自由に見てよい、そういう人がいつかあらわれるんじゃないかと思っていた、父親には話をしておく、といってくれた。そして最後に、

「構いません、たとえ刊行されたとしても気にはしません。半ば頃から気持ちのどこかにそんなつもりがありましたから。読んだだけでは、信じられないかもしれないから、直接お話できればいいのですが、まだしばらくは戻らないつもりなので」

本人のいないところで好き勝手に日記を開かせてくれ、公表さえ厭わないとはありがたい、さすがイ多しの友人だ、と少しうれしかった。

私はその翌々日には寺の古い庫裏に入っている。

ようやくその日記を見つけて読んだとき、それまでは空想と思われていたイ多しの述懐

が、第三者の記述によってにわかに現実性を帯び、眩暈のような高揚感をおぼえた。それは鉛筆で十数冊の大学ノートに書き散らしてあったものを、ある時期にばらし、一枚一枚に糊代を作って、そこをボンドで貼り合せ、さらに錐で穴を開けて綴じ、硬い背表紙と表紙とで製本したものだ。ズボンがプレスできそうなくらいの厚みがある。製本後も日記は続けられていて、まだ綴じられていない十数冊のノートもあった。私は丁寧にページをめくる。

十歳の誕生日から高校卒業の日まで書かれていた。イ多しとの交友にふれないページはなく、死後ですら変わりが無い。

読み進みながら私の脳裏には、イ多しのエクスタシスに関する記述がいく度となくわき上がっては消えた。彼がその天啓のような体験を自叙伝的遺稿『**恋**（アーク）』の中で語った部分だ。

『記憶する限りにおいては、僕の最初のエクスタシスはそのとき訪れた。四歳だった。

詳細な状況はむろん、憶えていない。多分、自宅の台所だったのだろう。大きなテーブルがあったことだけは、いまでも鮮明な映像として浮かぶ。その上におかれていた、一枚の紙切れ、なんの用でおかれていたのか、まったく関知しないものであるが、紛れもなくそれはあった。ただの白い紙切れに濃い鉛筆でくつきりと書かれていた。

「**イ**」

アルファベットの、そのただ一文字である。

僕は烈しい高みの感情に襲われた。いやそれは感情などというには、あまりに澄み、精妙で、聖なる、大いなる凌駕だった。正確に語る言葉を僕はいまだに持たない。胸がすぐ感じが極限までに強烈になったように感じられ、自分が光速それ自体になったかのような天翔ける凄まじさを以てすべてから解放され、意識の明晰による広大感覚に陶醉させられる。宇宙を睥睨する光輝の雲の上に立って、星よりも遙かな彼方を眺望するような、一切のことがらを凌ぎ離れた、燦然たる歓喜に漲りあふれる瞬間だ。

かららかな、爽烈な、平寂なる無際限、不死になったかのような解放感

まさしく解放感だ。我々は普段自分たちがいかに死から重圧を受けているか自覚していない。気がついていない。だが不死を感じるとき、そのあまりの爽快さ、自在無限のからかさに驚愕し、晰らかに知る、どれほど死が我々を圧迫していたかを。

死なくともよいのだという感覚を想像することは不可能だと断言しよう。体験する以外にはないのだ。

不死とは単に死なくて済むということではない。死なずに済むといっても命が失われるという可能性が解消するものではない。死という概念が消えてしまったわけではない。それを不死とは呼ばない。

死そのものが無効にならなければ不死を成就したとはいえない。

それが達成した瞬間の自由と歓びとは想像を絶する。これに比せばあらゆる快樂や愉悅が重圧であつたと感ぜられる。そして想像さえしなかったものまでもが重荷であつたことに気がつかされる。そのあまりにも大きな解放に比べれば、どのような幸福もみじめな抑圧感にすぎない。日常において僕らがいかに重さに圧されて暮らしているかを悟る』

この一節は私を憑かれたような『イ多』研究へと駆る契機となったもののうちの一つだ。遺稿とはいっても、実際、デビュー作以前から記され始め、死の数日前まで続けられていたもので、全著作中で最も長く興味深い。私を惹いて止まない文章が随所に鏤められている。随分読み返した。

しかしなんども復た読むというのは、彼の著作がわずかばかりでしかないせいでもある。十六歳で青眸文藝社の新人文芸賞小説部門の大賞を獲り、名声をなすも、一年後に天折十数年後のいまではまったく忘れ去られてしまった彼を私が見出したのも、まったくの偶然であつた。

私は十六のときから十年近くブルーズ・バンドでハープを吹いているが、金に困ってフリーマーケットでギターやアンプや楽譜（といってもタブ譜だが）やレザー・コートを売りに出したことがある。そのとき隣が蔵書を売っている大杉啓子という女の子で、私が暇つぶしに話しかけたりハープを吹いてみせたりしていると、一人の男が立ち止まった。いや、人はいく人も立ち止まったのだが、その男だけしか印象にない。

「『うつくしき曇天の街』ですか」

男は黒っぽい表紙の本を手を取った。

「熱田五郎ですね」

やっと大杉さんは返事をした。

「ええ」

彼女の答は心もとなかった。恐らく読んでいないし、作者のことも知らないのだ。

「読みましたか」

同じことを感じたのだろう。

「いいえ。亡くなった祖父が持っていたものなんです」

「残念ですね。読む価値があったと思いますよ」

大杉さんは少しむっとしたようだった。

「そうなんですか」

蓬髪の方は寂しげに微笑した。

「いくらでしょう。譲ってください」

まだ三十歳ぐらいの容貌でしかない男の声色には枯れた老成の響きがあった。彼は名刺を置く。

「もし読む気になったら連絡ください。いつでもお貸ししますよ」

男が去ってから見せてもらった。『骨董 おんこしゅうきしゅんしんどう 恩顧士結城春深堂 あまやすまことや 天易真兮』。

「ねえ、わたし、この名まえ知っているわ」

「そんなに有名な骨董屋なの」

「違うわよ、文芸誌によく寄稿しているのよ、評論とか」

私はその文芸誌が青眸文藝社の『青眸臥龍』であることを調べ、バックナンバーを取り寄せて今年の三月号に載った『平成異形者列伝』を読んだ。

私はそこに評説された数人の芸術家のうち、一人に強く惹かれた。夭折というものは、本人にとっては悲劇であるが、歴史として眺める者には短絡的な夢想の誘引剤となる。読み本のようなロマンティズムを煽情するのだ。

それがイ多しだった。

現存する作品は習作も含む未発表のものをに入れても、わずか五作にすぎない。そのうち一つは小学生時代のもので、小説のうちに数えてよいかさえ定かでなかった。だが真兮氏は列伝の文中でこう論じる。

『或る一人の児童に芽生えた、イ多しという作家への兆候ではない。本質である。普遍化された概念の一般性に汚されていない分、思考のいまだ衝動的な、未分明の状態であり、原的状态、すなわち純粹だ。』

空前絶後の天才探偵が空前絶後の天才犯罪者のトリックを暴くという物語である。巨大なレンズを使って被害者を焦殺するという、あらゆる方面から考えてあり得ない設定なのだが、突拍子もないことをしようとする意欲に、彼らしい超絶的なものへの嗜好が窺われる。

だがそれ自体は一般にもよくあり、大したことではない。

むしろ興味深いのは作中のエピソードだ。

場面は列車から始まる。探偵は深く椅子に腰かけ、『思想』に耽っている。

線路は幼年期のイ多しの重要なキーワードだった。列車とは不思議なものである。同じ中にいて先頭はaという景色に遭遇し、後尾はbという景色を眺める。そこには既に先頭がやがて未知なるcという景色に直面し、後尾は景色aに遭遇する興奮が含まれている。

時空の不思議とは、存在の不思議でもある。時空があつてはじめて可能となる先々の展開、未来への拡がり存在は前提としているからだ。時間性と空間性がなければ、なに者も存在感を維持できないのはだれの眼にも自明であろう。

すべて存在というものを実存的に解釈すれば、存在者の自己開示が我々に与えるインパクトのことであり、自分の将来に存在者がどう関わってくるかを知っておく必要から生じる。脳髓という自然が我らの生存のために意識上に構築してくれるものことだ。

死すべき人間であるから存在が必要とされる。そのことを構造的に諸細胞が熟知しているから現象がある。自らの生を脅かし、また悦ばすなんらかの抵抗性がなければ諸器官においてなにが起ころうか。次の瞬間という『将来』がなければそれらは場を失う。

だとすれば不死なる者にとっての存在は、死すべき我らにとっての存在とは異なるものと考えてよい。不死の者には自らの肯定すべき事柄が喪われることを慮る必要性がない。

不死なる者にとっての存在とは純粹に存在としての存在である。いわば物自体としてのあるがままの存在である。

そのようなものは我々の感覚には映らない。真に客観的な事実とは、我々に無として映る以外はない。不死の者にとっての存在とは、我々にとっての無なのである。

彼らと我らとでは、相互に世界観が顛倒していると考えてよい。

話が逸れた。

さて、その列車に坐って探偵がなにを考え、法悦しているかといえば、それは石嶮である。立方体もまた、幼年時代の重要なキーワードであった。

彼はよく宇宙より巨大な石嶮のことに言及する。イ多しは四歳のとき、父親から宇宙は無限の大きさをもっていると教えられて衝撃を受けている（もつとも、この認識は科学的には誤りだ。想像を絶する広さではあるが、有限とするのが今日の通説である）。そしてそのときにもやはりエクスタシスを感じている。

無限の拡がりというイメージはしばらくの間、エクスタシスへの強烈な誘引剤となる。

ところで無限というものを映像として空想することは実際、不可能だ。どうしても有限になる。なぜなら或る種のかたちをとらざるを得ないからだ。だがイ多しはこう述べてい

る。

しかし僕は時折それに成功した。無限が巧く空想できたのだ。それは隻手のみで打つ拍手の音を聞けという禪宗の公案と似ているのかもしれない。エクスタシスに襲われ、体中がすうっとするのだ。生気があふれ、かろらかになる。豁然たるこの爽快を知れば、もはや人生はそれ以外にあり得なくなる。とり憑かれた者のように繰り返し求めずにはいられなくなる。

やがて無限を想像することでは、刺激を受けられなくなる。人は皆、飽くのだ。次には、無限を超える拡がりを実感することが要請された。彼は石鹼を選んだ。無限の宇宙よりも巨大な石鹼を想起することでエクスタシスを得られるようになる。

彼にとってエクスタシスを誘引する基本は炸裂性であった。超えられるはずがない無限という枠を超越することは、その不可能性によって一つの炸裂なのだ。また立方体（石鹼）はその角在性からリアリティの本質であるインパクト、つまり炸裂性を具象するものであった。

無限よりも巨大な石鹼とは、彼にとっては深い強烈な晰らかさを持つイマジネーションだったのである。

『』を発見するまでは

私は真分氏の文を読んだ翌日に古本屋で出版本を入手する。

収録作は、新人賞を獲った『モスコクール民族紛争史』と、その後に『青眸臥龍』に掲載された『妙観の彫刀』だけだ。公になった作品がこの二つしかないからである。これら以外にあるといえ、前出の探偵譚『自然焼失殺人事件』、中学時代の習作『未完成』、自叙伝的遺稿『アーンク』だけである。

やはり処女作といえ、『モスコクール』になるのだろう。

『モスコクール』はこの世界に似た架空の世界にあるモスコクールという城砦都市の物語である。そこで起こる異民族異宗教間の争いに絡め、エクスタシスを主題として扱っている。主人公はイ多し、彼のペンネームがそのまま登場人物の名前になっているという、純文学らしからぬやり口だが、あえて意図的になされたと思われる安っぽいインパクトが私には快い。

そういう安っぽさで、なに者でもないただの現実性の乾いた傍若無人な感じに同調し、くい込もうとしているかのように見えた。それが成功しているか否かより、行為自体が私の胸を躍らせる。

イ多しは、イ多しの名もまた真実の名まえなのだと主張して憚^{はばか}らなかった。

遺稿『アーンク』で彼はいう。

『なぜなら僕がモスコクールに住むイ多しだからだ。その古い街は北大陸^{ノルデ}にある。

大陸南部の中央に位置し、ユーラシア大陸でいえばインドと同じあたりだ。もっとも緯度はそれよりはるかに高い。北緯四十一度くらいだ。ノルテはユーラシアより広いが、南北に短く、東西に長いのである。ユーラシアの西端をハワイ諸島まで引っ張ったと思えばよい。

南大陸^{スール}との間には、裂南北大陸間海洋がある。

その海から大河モルロヴに沿ってノルテを北へ一千kmあまり溯上すればパロヴィク平原に至り、モスコクールが河を挟むようにして周囲五一kmの城壁を廻らせている。基底部で最大十mを超える巨石の壁の厚みは難攻不落を謳われた。数次に渡る拡張増幅工事を経て完成されたこの石壁は最も低いところですら高さが十九mを超え、冷厳な磐の無表情を以て平原と彼方の山嶺とを睥睨している。

偉容を做すこの都市国家も、最初はパーリ族が造った小さな砦であった。

その砦の位置は現在、旧市街の一面を做すモルロヴの中洲の一端で、当時は本杭の壁に囲まれた原始的な前衛基地であった。彼らの言葉で砦をヴィクと謂う。本来は狭い入り江を意味し、彼らがかつては海辺の民であったことを示唆していた。モスコクールの名がモスカ・ヴィクラール^{モスカ・ヴィクラール}陸上の入り江なるものに由来することは晰らかだ。

小砦時代から百年後、パーリ人の中で有力な豪族^{グランデ}が形成され、すべてをグランデの会議で決する豪族連合の時代が訪れる。そして齊曆一六八一年、すなわちいまから千年以上に若干十八歳でエルパーリ家の家督を世襲したハル獅子^{しじ}コは、豪族を統一し、自らをモスコクール王と称した。彼は数々の大土木工事を実施し、中州全体を難攻不落の城砦都市にするとともに、モルロヴ西岸に造船工廠を数多建設し、水運業に本格的に乗り出した。やがてモスコクールは水運交易の要所となる。

こうして千年の繁栄の基礎が築かれた。

人々が僕の空想を嗤うとしても咎めはしない。しかし現実たるゆえんは脳髓の自然が附与した現実性のみに依存したバーチャル・リアリティであることは、だれの眼にも晰らか

だ。

すべてが夢、などとはいわない。

事象は客観的に存在する。だがそれは無色透明で、無臭だ。

現実性はたとえば色彩のようなものだ。人間は生命の原理から込み上げる彩いろどりを先天的に持つていてそれを無着色のものに向かって投擲し、染めつけてそのかたちを做さしめている。

その实在物が感覚に与える刺激の特性のせいではなく、純粹に内的な動機から発しているのである。

僕らは脳髓の自然が僕らに与える『現実』という色彩を勝手に変更できないから、動かしたい、切実な、客観的实在の事実だと思ひ込まざるを得ないだけなのだ。

現実と客観的实在とは、まったく異なるものである。

もし僕に主権があつたならば、モスコールこそが現実であるとすることもできたはずだ。動機は僕らの自由にはならない。僕らの衝動は僕らのものではない。

だから僕らに自由意志はない。僕らが普通に考えるような意味での主体的な自らの意向はない。意志は植物のように自然の摂理によって生えてくるだけのものだ。そんなことがあるものかと反駁し、その証拠としていま右手を挙げようと言志して右手を挙げることもできるという人がいれば、僕はそれも自分の意志ではないと応えよう。

意志を以て動作することがなぜ自由意志の証なのかを根本からは説明できないという点がまず挙げられる。僕らは実に当然と思つてゐる論拠の、その論拠を知らない。僕らは最初から与えられた論拠の世界で生きている。その動因を知らない。自分らしさやオリジナリティなど、滑稽な概念だ。僕は反個性主義者である。

だから人間の誇りにおいて、あえて主張したい。イ多しであることは真実なのだ。僕は世界を自由に解釈し、構築しようとする。自由意志でなくとも人間であることの、この権利を主張したい。自らを常に超越し続けようと欲し、自分の顱頂骨を踏み台にし、高く翔け上がろうとする、脱自態エクスターゼをも裂き破つて、さらにその上の脱自態エクスターゼであろうと欲する、それが生命の根源から衝き上げる原理だ。宇宙の一部である人間が、宇宙を衝動させる原理と同じ原理によつて衝動する。根源的な動機だ。

人は常に現状の自己を超越し、人間へと変じてきたではないか。無為であつてなんだろうか。無為に闘い、翼が折れて墜ちるのだ。結構ではないか。むしろ自由で心地よい新鮮な空気がこの革新にはある。明晰なりアリティがある。

なによりモスコールを想うことには、無色透明の世界へ、無臭への一步、真の客観性に至ろうとする宇宙的動因に基づく真性だ。

モスコールとは僕にとっての、新しい「**人**」だ。僕は戦略的に、合理的な感覚の濫用をする。そこに生じる裂帛、そのリアリティで飛翔を狙う。エクスタシスの真を極めた。い。

一步間違えば現実逃避だとしても、最も巧くすれば千年後の脱自態に向かつての、橋を架けることとなるのだ』

少なくとも私にとっては魅惑的な文章だ。昂奮の情を呼び覚ます。しかし小説などそれまでは親しむ機会がなかった私が彼の文学を、特に遺稿を読破するのはその長さと相あまって、難解さのために時間を要した。用語というのか、術語というのか、まず言葉がよくわからない。

たとえば、主諧調ともいえる、脱自態、という語だ。
エクスターゼ

『人間という存在のあり方は脱自態である。動植物もまたそのレベルにおいて脱自態を做す。人間としての脱自性に達しなければ、その人には人としての特性がないといえる。人としての脱自態がなく、動植物と同じであるならば、人という分類の必然性がなくなる。動植物よりも自己を超えた行動のことができることが、人類の証である。人間が生まれや育ちによって価値を決せられるものではないとは一般論でも公理だ。他者のため行動することが人間のあるべき脱自態である。家族や仲間のために闘うことは動物でもする。それ以上に脱自的であることが尖駟ける者、人間であることの証だという論は自明なのだ。すなわち人はその行為によってのみ評価される。脱自態の程度によって人間性を識別できる』

彼のエクスターゼ論には、ここにも見られるとおり危険を孕んだ思想も含まれる。人権擁護家なら激越するかもしれない。

動植物との比較ならば、叭ら蜜太の日記に登場するイ多Lの方がより具体的に語っている。十四歳のときだ。

『奴はふられたせいでおかしくなっちゃったんだ、おれには本気でそう思えた。昔からおかしなことしかいわない奴だったが、最近、狂躁的だ。

奴は構いもせず枯山水の砂利を散らしながら横切り、一番大きな石の上に坐った。おれは親父に見つかっただらとやされるので気が気じゃなかったが、やがて奴の話に惹き込まれた。いつもいつもそうだ。奴はいった。

「人は知るべきだ。いや、たとえ見たものが信じられなくとも、ともかくも僕らは現に類

人猿よりかは高度なエクスターゼに生きている。猿よりかはるかに脱目的に生きている。主観的立場に囚われていない。

君も知っているだろう、例の類人猿の実験をさ。猿は自分が檻の中にいて檻の外で手の届かないところにバナナがあるとき、棒を道具にしてバナナを手許まで引き寄せることができる。だがバナナと自分との間になにか障害物、たとえばU字型の枠などがあつた場合、バナナを一度向こうに遣つてまわり道させてから餌を引き寄せなければならないが、それができない。

今度は逆に檻の後部を開けて、猿の方をU字型の檻に囲まれた状態に置くと、一度後ろにさがって（つまりバナナへの距離を一時的に大きくしてから）障害物である檻を迂回し、餌を取る。自分が迂回することはできるんだ。この違いがわかるかい？

つまり自分が迂回してバナナに近づくことはできるけれど、バナナを迂回させて自分に近寄らせることができないんだ。

不思議に思わないかい。自分の身体をして迂回の軌跡を描くことはできるのに、自分の身体以外のものでは迂回の軌跡を描くことができないんだ。自分が迂回する、他者が迂回する、位置が入れ替わるだけで同じ空間内の同じ迂回という動きなのに、類人猿にはそれがわからないのさ。

なぜだか知っているかい？

人間にとっては理解不能の不幸に思える。自分が迂回したように、バナナにも迂回させればよいではないか。自分が迂回することと餌が迂回することになんの違いがあらうか。両者にとって空間は同じく開かれている。立場が異なっても空間における可能性は同じではないか、と。

だがそうじゃないんだ。対象物が迂回するのと自分自身が迂回するのでは猿にとってとは天と地ほど異なるんだ。

いいかい、自分が手元に引き寄せようとする対象に障害物を迂回させようとするときは一度自分が対象物の立場になってみなければならぬ。自分がもし対象物だったらどういう軌跡を描くべきかを考慮し、想像してみなければならぬ。対象物の立場になってみてはじめて障害物の迂回が呑み込めるのだ。

しかしそのためには相手を自分同様の存在者として納得する能力が必要となってくる。同じように運動の軌跡を描けるものだという理解が必要になる。それがわかつてはじめて空間はなに者にも一般的に開かれていることが解せる。

ところで相手を自分同様に一個の存在者と認めるということは、自分の主観的立場に囚われないことが必要になる。自分という立場を越えられなければならない。

すなわちそういうレベルのエクスターゼであることが必要なのさ。

ところが猿にとっては、バナナというのは一個の存在者でなく、自分の欲を発動させ、取得しようとする行動を促すための合図でしかないのだ。スタートを告げるシグナルではない。赤なら止まれ、青なら進め、さ。自分にとっての、或る行動を促すシグナルではないんだ。自分がいてもいなくても実在する存在者ではないのだ。自分に関わらぬ他者であることが是認されていないんだ。人間のように客観的な立場に自分を置いてみる事ができない。人間のように客観を以て見る事ができない。

彼らには僕らが考えるような意味での客観的実在の世界がないのさ。

この違いは慣れない人にはちよっとわかりにくいかもしれない。人間にとって世界がだれにも開かれていることや、『もの』が他者であることはあたりまえになりすぎているから。そう、類人猿にとって世界は閉じているし、餌は『もの』じゃないんだ。

だがともかくもこれによって人間が猿よりか高度に脱自態であることがわかる。つまりより脱自的であるとは、他者を認め、主観に囚われる程度が低い、より客観的な立場を持っているということだ。脱自的とは、客観的の別の謂いであるといっている。

猿には僕らの見ている客観世界が想像もつかず、僕らが見ている世界と猿が見ている世界とが全然違うように、次代のレベルのエクスターゼにある者の見る世界と僕らの見ている世界とがまったく違う可能性は高いと考えるのは当然の推察だろう。

ねえ、僕らは普通、世界をあるがままに見ていると思ひ込んでいる。だが実はそうではない。脱自の度合いによって客観度が変わるから、僕らが見ている世界は飽くまで僕らのレベルの世界なんだ。

もし僕らがいまより高度なエクスターゼに達すれば、この世界を脱皮して、まったく異なる世界に立つことになる。君は笑うだろうか。だがそれは君の見識が浅いのだ。過去に僕が考えたようなことをいった人間がいなかったとでも想うのかい。僕の実想は決して新しいものではない。人類史上、最も古い、最も正統な思想だ。これと同じことを語った、特別な、超越的な人たちはいく人か歴史上に名をとどめている。彼らはいわば、普通の人間よりも進化していた人たちなんだ。僕ら人間が猿よりもいくらか進化しているようにね。むろん、それだけが論拠じゃない。僕は自分の体験からいうんだ。そう、僕は幼い頃からエクスタシスをなんども経験している。あれは幻覚や陶酔や、法悦や恍惚じゃない。

もっと晰らかで、静寂を以て高揚し、澄み切った拡がりの超越の、崇高なる神々しさの、感情とはいえないような感情だ。狂熱などはない。すべてがあるがままにあるという、深淵で無辺な、ああ、とても言葉で説明できない感覚さ」

累紗楠のせいで（といっては彼女にわるいか。いたるのような奴にだれがついて来られようか）、奴は感情的になり易くなっていた。語るうちに段々憤激し始める。自分という主観的な立場に囚われている。

「呸ら蜜太、欲しい物が手にはいらなんたておかしいじゃないか。だったらそんなものはじめからなけりやいい。そうさ。

努力すればよいという。夢や希望を抱き続けるんだともいう。だがなぜそんなシステムなのかを訴える奴はいない。

「だれも現実主義者じゃないのさ」

「いなくはないだろう。皆、無駄だからやめてしまっただけさ。いったってどうにもなりやしないじゃないか。駄々をこねても埒が開かないからな。そうやって大人になるのさ。

普通それが現実主義だ」

「そういうのを現実迎合主義というんだ。もしくは敗北主義だね。与えられた現実を受け入れることが成熟だっという発想はね。

欲しいものが実際に入手できる手段を講じることが現実主義だ」

「いや、むしろ、現実を変えて理想に近づこうとはするさ」

「だが根本的な問題から逃けている。それで心底の幸せがあるもんか。いいか、呸ら蜜太、考えてもみろ。

「だれもほんとうの幸福じゃない。だから欲望はなくなるらない」

「欲望がなくなったら、生きる意味がなくなるじゃないか」

「それが奴隷根性だっというのさ。なくなるのは生きる意味じゃない。馬車馬のように身に鞭の轍を穿つ馭者がいなくなるだけさ。すべてが完遂すれば欲するはずがない。かろらかにになれるんだ」

「ばかばかしいぜ。どうにもならないだろう。くだらないよ」

「翼があればいい。僕はいままで気がつかなかったよ。僕はなんども飛翔を経験していたんだ」

「またその話かよ」

実際、奴はもう、幼稚園時代にはじめて会ったときからそれをいつていた。エクスタシ

スのことだ。ただ当時はその言葉を知らなかったただけだ。

入園式の日が雨だった。奴はだれのいうことも聞かず、幼稚園の庭に突っ立って空を眺めていた。式が始まり、母親が手を引っ張っても抵抗した。抵抗といっても声を上げたり、暴れたりの幼児のスタイルではない。つかもうとする手をかわし、蔑むように冷笑する。

「おかあさん、見てごらん、龍の群れが翔けているんだよ。雨は龍が降らせるんだ。僕、知っているんだよ。龍を見ると、すごく気持ちよくなるんだ。だから僕はちっちゃい時から雨が好きなんだ。おかあさん、僕が雨を好きなの、知っているでしょう。

入園式なんか出なくても構わないんだよ。人間のやることなんて大して面白くないんだからね」

そう言って指差し、見上げ続けた。

おれはどういうわけか、その雨の中にすたすたと出て行く。

「おまえ、いい加減にしろよ、入園式が始まらないじゃんか」

奴は面白そうにおれの顔を見るだけで応えなかった。始終こんな態度だから、奴はその後もしきりに同級者の怒りを買って撲られていたもんだ。おれは奴の襟首をつかもうとするのだが、濡れていてすべるから鱗のある生き物を捉えようとするときみたいに逃げられてしまう。奴がいった。

「君、お線香の匂いにするね」

どうして土砂降りの中で匂いがわかるんだろうかと少し気味が悪かった。

「あたりまえだ。おれん家はな、貞観正國寺だぞ」

「ああ、あそこ、僕好きだよ」

「おまえみたいな変な奴、来ちゃだめだ」

「無理だよ。僕はもう、あそこの大楠の木と友達なんだ」

「はあ。ばかじゃないのか、おまえ」

「知らないの？ 彼はすごく賢いんだ。優しいし、なんでもわかる」

「なんだ、それ。あほらし。おれはもう、中入るぜ」

「そう。いつもだれにもわからないのさ。皆どうして目を閉じているんだ。僕は君たちとは関係ない、モスコクールから来たんだ」

「モスコ？」

「僕らがいる世界さ。君もいる」

「おれはそんなところ知らない」

「違うね。いまも君はモスコールにいる。ここがそうさ」

「ここはここだ。畝邨だ」

「見ないから見えないだけだ。感じなければ感じられるわけがないさ。どうして君たちはわざわざいやなことばかりしているんだ」

「なにいつてんだ。ふぎけんな。いいからおまえも入れよ。びしょびしょだ」

「龍がほら、泳いでいるよ」

奴が指差す頭上をおれもつられて見上げる。

雲に見え隠れしながら、蝶鯨みたいに空を泳ぐのが十数匹見えたような気がした。

「あれ」

「君には見えるんだね」

「違うやい。眼に、雨が、だからなんか変な風に、それで」

「君の名まえは、なに」

「ぱらみた、だ」

思わず応えてしまった。それが奴とのつき合いの始まりだ。奴はいかにもお世辞的な微笑をしゃがった。

「いい名まえだね。空を飛ぶみたいの名まえだよ。」

ねえ、ぱらみた、僕は飛べるんだ」

エクスタシスっていう言葉は、なんでもギリシア語らしい。はじめて使い出したのは十歳ぐらいのときだった。奴は頻繁に貞観正國寺へ遊びに来ていたが、その日も本堂の畳の上に裸足の両脚を伸ばし、天井に描かれた『雷霆怒濤之龍図』を眺めながら、いった

「鱗がすごいね」

「へへ」

「すごく細かい。一つ一つ精しく丁寧に画いてある。鱗の半弧を正確に堆ねて仕上げをしているよ。大きな、大きなお屋敷の瓦屋根みたいだ」

「おまえ、もしかしてあの龍のこといつてんの？ 好きだね」

「精密なものつてきれいだ。胸がすうつとするんだ」

「なあ、憶えているか、おまえとはじめて会ったとき、おまえ、龍が見えるって騒いでたんだぜ」

「騒いでなんかいない。それにあのときは、君も見たはずだ」

いまにすれば不思議でしかないのだが、会話していたときはその記憶が甦らなかった。

「見てねえよ。嘘つくな」

「いや」

奴はそれ以上いわなかった。

しばらく沈黙が続いた。驟雨が来た。香の匂いがし始める。おれは眉を顰めた。急に湿度が高まったせいかとも思う。

おれはいたるを見た。奴の眼が遠くを見上げている。天井よりもっと向こうだ。口が半開きだ。薄暗い堂内で、おれにはいたるがほんのり白っぽく見えたような気がする。

「おい。なにずっと黙っているんだよ、気持ちわりいな。死んじやったのかよ」

それでも奴は動かなかった。

「おい、ふざけてんのかよ」

睫毛を上下させた。こっちを見る。

「いたる！ なんなんだよ」

少し本気で焦った。

「叭ら蜜太か」

「おれさ、おれに決まっているじゃんか」

「しかたないよ。エクスタシスが来たんだ」

「え。なにいつてんだかわかんないよ」

「エクスタシスだよ。知らないの？」

知るわけがない。

「君はずっと前から僕を変な奴だと思っていただろう。僕もときどきはそうかもしれないと考えることがあった。でもそうじゃないんだ。僕のはエクスタシスなんだ。それがわかったときすごくほっとしたよ。」

僕をおかしいだなんて、どうしたって間違っているとは思えなかった。エクスタシスがあんなに自由で、静かで、満ち足りて広々しているのに、なにもかもが鮮やかで、幸福にあふれ、すべてがすっきりして胸が軽くなるのに、おかしいはずがない。もしそれが間違いだというのなら、生きていることになんの意味もないよ。世の中のことなんて、すべて苦しいだけのことじゃないか。普通の人たちの方がおかしいんだ。他の人たちのやっていること全部がわずらわしくて重苦しくて味気なくて狭くて腐って見える。疲れて気持ち悪くていららしているときの感じに似ている。苦しむことになんの意味があるんだ。意味があるようなことをいう大人もいる。最初から完璧に幸せでなんの不都合があるんだ。

なんでわざわざそんな回り道をしなければならぬかを説明できる大人はいない。苦勞がなくても幸せのありがたみを知り、幸せをはっきり感じ、強い意志と深い智慧と屈強な経験と敬虔な心がけとを備えて、要するに最初から完璧なたちで幸福に生きられる人間を創っておいてくれれば、それでよかったんじゃないのか。なんでそれじゃいけなかったんだ。そう思わないかい？　なんで思わないんだ。

苦役なんていらぬ。地を這う生き方をし続けなければならない根源的な必然性はなんなんだ。

エクスタシスは正しいよ。

僕だけが正しいんだ」

おれもそうだったが、奴も年齢不相応な読書家だ。こども向けに直された名作シリーズの類は七歳ぐらいで卒業し、八歳ともなれば読めない漢字などほとんどなかった。『レ・ミゼラブル』も『罪と罰』もその年頃で大人と同じ版を読破したし、ニーチェやハイデガーなども小学生時代にいくつか読み終えている。奴もおれも同様に、父親の蔵書を漁り、他の同級者との会話では偽善とならざるを得なかった。気取ってもいたと思う。

当時、奴はギリシア哲学の中からその言葉を見つけたといていた。自分の中から脱^シス^ス出る。奴が幼稚園時代からいい続けてきた体験がこの言葉で表現できるのだという。

中学に上がったくらいから、ハイデガーの『存在と時間』の中にあるエクスターゼという言葉に独特の意味を込めるようになっていた』

抜粋最初の記述にもあったが、イ多しはこの時期に失恋を経験している（と主張している）。相手は累紗楠^{らさな}（仮名）。というか、作中の人物の名をあてさせてもらっておく、という転校生だった。

私は幸い、三十一歳の累紗楠に会えた。彼女は女子高を卒業後、一時イタリアに留学し、帰国後S大学を卒業し、いまは女性向の雑誌の編集者になっている。連絡を取って都内のバーで待ち合わせた。彼女の勤務先は青山にあったが、麻布の地下にある店に一時間遅れで来た。

「あなたが也節^{やふし}さん。ごめんなさいね、おそくなって」

猫科のように大きい眼にはどこか尖った感じがおり、頬骨は低く、たて長の腔を持った鼻が高々としている。首は細くて長く、顎が鋭角で、小麦色の膚をしていた。

「也節隆臥^{たかふし}です。気にしないでください、斉木さん。こちらこそすみません、ご足^た労^いいた^だいて」

「いいのよ。よくここには来るし。あ、マンハッタン、お願いね」

落ち窪んだ眼窩に眉毛が長くかかった、白髯のマスターがよく存じ上げていますよというように黙って頷く。

「いたるくんのことよね」

「彼に関して思い出せることならなんでも」

「あまりないわね。」

中二のときに転校して来たのよ、わたし。父の仕事の関係で十一歳のときからフイレンツェに住んでいたんだけどね、その事業が失敗しちゃって、わたしたち家族は東京にも戻れなくて、父の実家のある畝邸に帰って来たの。

それでいたるくんとは一年半の間、同じクラスだったんだけど、そうね、中学時代は話をした記憶もないわ。ただ彼が新人賞を獲ってから、一回デートして、そうね、二週間くらいつき合っていたわ。でもね、なんとなく別れちゃったのよ。もうはつきり憶えていないけれど、やっぱり性格合わなかったって感じだったわ。

そう、それでそのデートだけどね、わたし、驚いたわ。彼から電話があったのよ、高校一年生のときよ。ほんとうにびっくりしたわね。だって彼って、わたしの当時の感覚だとそういうタイプじゃなかったし。

変わり者だったけれど、外向きじゃなかったのよ。で、わたしはこういう感じでしょう、中学を卒業してからまったく姿も見えていなかったし、ほとんど忘れかけていたし、だから意外だったの。

でも彼、雰囲気違っていたわ。賞獲ったせいかしらね」

私はグラスを傾ける彼女の横顔に見入った。鼻筋が中折れで、折れたところが少し高くなり、鼻尖に向かう勾配の角度がそれまでよりか微しすこ緩くなるが、尖端部分でまた急激に傾斜がつよくなる。睫毛が濃いために、眼がくつきりしてなにかを凝視するときには余計にきつい表情に見えてしまう。

イ多しの素描を思い起こした。

『エジプトの壁画を思い出すがいい。パピルス紙に描かれたあれのことだ。ウジャトの眼さ。僕が焦がれても把握できない、生のように。雲の翳りや日差しに変わる湖面のように光揺れ、瞬き、いつも活き活きとし、じっと見つめるときでさえ動いているかのように移ろう、捉えられぬその双眸。』

彼女の眼差し、僕の心を憧れで鞭打ち疾駆させる。焦燥させる。彼女のその晴ゆえに、

あらゆる存在者が明晰を得る。

彼女を失いたくないという、僕の未来への畏怖が、僕の実存を輝かせる。すなわち僕の目に映るものを、僕の耳に聞こえるものを、僕の鼻腔に嗅がれるものを、僕の舌に味覚されるものを、皮膚にあらわれる触感を燃え立たせ、羽ばたかせ、世界のすべてを黄金に変える』

私は実際の累紗楠を眼の前にしてイ多しの描写との差異に、やはり意外の感を覚える。奇妙だ。

「不思議に思っているんです」

私はターキーが流れ落ちる氷の表面を眺めながらグラスを置いて彼女の方を向き、その話の腰を折った。

「え」

私と同じバーボンのお代わりを注文しようと挙げかけた手を下ろして累紗楠もこちらを向く。

「斐輔氏の文には、それは彼の遺稿なのでご存じないかもしれませんが（わたし、彼の作品は一つも読んだことがないわ、そういつて彼女は笑った）、こう書いてあったんです。

『僕らは運命によって、愛を成就することができなかった』って。

でもあなたのさきほどのお話だと、なにがあったということもなく、なんとなく別れたといわれるし」

彼女は瞠目して一瞬なんのことかわからないというような怒った表情をし、すぐに微笑を唇にし眉を顰めた。顔の皮下脂肪が薄いのか、東洋人にしては年齢の割に額に大きく皺ができる。

「そうよ。まあ、よくは憶えていないわ。

でもね、少なくとも愛し合えるはずだったのに運命によって引き裂かれたんじゃないことだけはたしかよ」

悪戯っぽく私を見つめた。濃い栗色をした眸の照りがくりくりとよく動く眼は、身軀の奥を甘く撫でるかのようなようだ。彼女の唇が情欲に濡れているような気がした。私はどこか醜くすらあるがゆえに彼女に強く惹かれてしまう自分を感じた。

イ多しの思い込みについては呟ら蜜太の日記にも記録されている。

『夏休みが終わっちゃった。だのにまだ暑かった。累紗楠という子が転校してきた。おれは、いたるに話しかけようとしてやめた。奴は本気だった。放課後、校庭の隅で奴はおれ

にいった。大昔の学園物ドラマにありがちなこの状況設定が奴は好きだった。一種のアイロニーを気取っているつもりらしい。

いたるは楠木に片手をあててやや俯き加減に寄りかかり、蜥蜴を殺すアポロンのポーズをとる。

「僕にはわかっていたんだ」

「またかよ。で、やっぱり累紗楠のことか」

「ちっ、そうだよ、累紗楠さ。ちやかさないでくれ。とうとう彼女は来たんだ」

奴は例によって話し始めた。モスコクールでのことだ。舞踏会の夜の話だった。いつもと違うのは主人公が累紗楠だということだけだった』

この話は遺稿の方にくわしい。それは『モスコクール民族紛争史』の原型ともいえる内容のものだ。

『十七歳。彼女にとっては、はじめての舞踏会であった。

香水をつけて白粉を刷き、絹繻子をまとって紗を羽織り、袖や襟にはエメル産のレースをおびただしくそよがせ、大きく開かれた胸元にリボンをつける。透かし模様のある絹の靴下は水色のリボン紐で留められ、最近実用化されたばかりのミシンによるスカートは襷や裾のフリルに飾られていた。繻子の靴にも大きなリボン、累紗楠は鏡の前で軽くターンし、

「ふん、少し瘠せすぎている。でも眸の烈しさが却ってその容姿を情熱的に見せる。彼女に魅了されない殿方はいまいよ。見たまえ、非常に美しい」

そんな風に噂されるのを空想する。ヘレネス地方風にいく条かの編み込んだ髪を冠の輪のように後頭部に回して結ぶ流行の髪型がとても気に入って、彼女は満ち足りた、歎きのような息を吐いた。

燕尾服に長い靴下と短靴という装いの父伯爵に手を引かれ、控の間からエントランスに抜け、玄関の大階段を降り、車寄せにつけられた豪華な馬車に乗る。

ランプが霧雨に滲んでいた。

累紗楠・ルワン胡ワの屋敷は、裏に聳える城壁との間に道路一本をはさんだだけという場所にある。正面大通りは富豪の商家が多く、この時間にはすべてが閉まっていた。

馬車は街灯のない道を左に折れて、アクেশオン通り、セプロ通り、ラテラ通りを抜けてコリント式の列柱がいならぶ、イクデオン大通りに出た。先には獅子門がある。それはハル獅E^ハラコが最初に造った城壁で、中州を中心に西岸と東岸とを囲み、河面の部分を除

けば、外周約四km、その内側がいわゆる旧市街と呼ばれる場所であった。この大きな道はボルドウックス橋をわたって一直線に元老院へと続いている。

獅子門の手前で右に折れた。

暗い夜道に行く車窓に打ちつける滴がガラス面に走って作る無数の流れしか見えない。

しかし旧城壁の古りし威圧を感じる。絹織りの帳の奥にさまざま彩りの繻子を重ねる内装に身を沈め、いざ会場へと向かう累紗楠は緊張のためとこの天候の影響によって不安な幻想を抱くのであった。あやかしの魔力によって深い森に迷い込んでしまい、出られなくなってしまうとか、或いは今日の舞踏会が全然異なる日でいつてみたら誰もいなくて落胆するなどというような愚にもつかぬことを、である。

大きな門の影が聳えていることに直前まで気がつかなかった。

敷地を走り、整然と列する数知れぬ窓から煌々たる光を放つ大邸宅の威容があらわれる。

「累紗楠、さあ、お嬢さん、着きましたよ」

父の快活な声かけに、彼女の憂慮は一時に晴れた。飛び出すように馬車にかけられた華奢な梯子階段を降り、車寄せを足に翼があるかのようにかららかにすぎて、エントランスへと昇る馬蹄型の階段に敷かれた緋羅紗のまばゆさに歓喜の声を上げた。

二階の大広間は、千人の人間の舞踏をその壮麗な大理石の装飾で迎え入れられる宏大さを有している。天井には蒼穹を舞う天使たちと雲に腰かける聖者たちとの画が本物の空のように描かれた。累紗楠の眼には、いくつもの大シヤンデリアが金剛石からできた太陽のような光芒を放射するように見えた。

父が彼女の手を引き、あちこちで賑々しい挨拶をかわす。そのたびに累紗楠は慎ましく微笑し、優雅に辞儀するのであった。高貴な人々のしぐさ、襟飾りや飾り紐、肩章、霞のようなチュール、扇子の動き、洗練された言辞、物腰、絢爛たる衣装、贅沢な調度、色大理石が做す精緻な意匠、それらを眺める彼女の身体には、あふれるような幸福が感じられた。

娘を紹介する父伯爵が感情を抑えながらも誇らしさからいささか度を失ったかのように紅潮し、満面で笑み、また彼女を見る老貴族は不躰なほど驚き呆れた表情をし、婦人方が眉根を寄せて優しく憂うような微笑し、若人たちは意味ありげな眼差しをしたり、一瞬のうちに讃嘆の念を顔に広がらせたりする、それらすべてが累紗楠には好ましくて身を震わせるほど悦ばしい。他の若い令嬢たちを見廻し、装飾や化粧や身のこなしを見逃すまいとし、またこれらの人々と自分とが同列するのだという意識を高揚させ、思わず胸を反らし、

顔を輝かせた。

やがて時刻となり、東の大扉から王が広間に入る。人々の歓呼が起こった。モスコークの王者アレクセイ^{クセイ}3世が鷹揚に右手を挙げると、主宰者であるレフ侯爵が合図し、柱頭に葉飾りのついた円柱の列の奥から、楽団が緩やかに音楽を奏で出す。

貴人たちの鮮やかな裾や襷の群れが大きく移動し始める。偉大なオペラのような、彼女は想う。既にいくつかの男女の組み合わせが旋回する。老いた者たちが坐るのを除けば多くの女性がタペストリーや大絵画や漆喰細工の壁に背を寄せ、男たちが腕を組みながら語り合っている。

王がレフ公爵夫人の手をとり、広間中央に身を翻した。

それにつれ、男性らは殷勤に令嬢や夫人たちの近くに寄り、胸に片手をあてて会釈し、一組、また一組と踊って行く。胸を高鳴らせながら畏れながら、待ち続ける累紗楠はいつしか哀しみに浸る。このまま独り取り残されてしまうのだろうか、だれも誘ってくれやしないんだわ。ああ、わたしがどんなにダンスが巧いか知りやしないんだわ。絶対に俯くのか、そう誓いながら眼差しは次第に睫毛に翳り、眸の輝きが奥に沈む。

「もしよろしければ、踊っていただけませんか」

その人を見上げた。

僧侶が儀式のときに着る金襴の長衣に紋章の入った軍人の装飾用肩甲をしている。紋は聖ヨヴィン騎士団の翼ある青き龍神だった。

「皆、あなたに注目しています。様子を窺っているのですよ。だれかが誘うのを見極めてから自分の行動を決めようと考えているのです。姑息ですね」

あけすけなものいい方と屈託のない笑顔。「叭ら蜜太と申します」といい添えて父伯爵の方を見た。累紗楠も父を振り向く。

伯爵が頷いてから彼女の耳に囁く。

「これは羅教の神に生涯を捧げられた僧にして騎士なるお方、高貴なるパラジュナヤ家の子息です。」

さあ、お手をお借りして踊ってらっしゃい」

累紗楠は踊りながら思った。「わるくはないわ。でも巧い人じゃない」

彼女の足捌きや優雅な動きが衣服の襷を表情させる巧みさに、叭ら蜜太が感嘆する。

「あなたは素敵な人ですね。そして美しい。すべてが輝いている。まるで生の悦びが舞踏するかのようにです」

「まあ、お辞ことばがお上手ですわ」

「いいえ、いいえ、すべてが真実です。あなたの存在が魂に与えるインパクトのように。そうです。まったく哀しくらいです。笑いながら涙を零す、かろらかな蒼穹の哀しみです。青春の燦然そのもののように。」

ああ、青春が美しいのは喪われて後に、二度と戻らないからです。もしそれが八十の齢まで喪われないものならば、その価値は半減以下でしょう。

私たち死すべき人間なればこそ実存はかくも限りなく不可思議でまた、稀有なるもの、素晴らしいものなのです。あたかも騙されているかのような気分ですよ。まるで悲しむために悦びがあるかのようだ。そう、私たちは欺かれているのですよ。生の歓びは瞬間的に時間をも止めるかのように高く翔けるのに、苦しみは地を這うように長く、強固で動かしがたく、切実で、人生を経るうちにそれがリアリティそのものであるかのように思われて行く。

私たちに有価なものすべてはすぐに苦しみに変じるのです。愛も名誉も成功も勝利も、存在するもの一切は喪われる畏怖なくしては存在し得ないかのようです。生命の輝きは、異逆なくしては時間性によって与えられたその燦然を喪うのです。

むしろ無為を求めた方が現実的な幸福であるかと思われるほどに、無為が実は有為であり、有為とは実に無為であるかのように。

理性ある人間なら、迷わず現実を選択すべきでしょうね。理性的とは現実的の謂いであるともいいますから。到底、そのような超絶した人間になど、だれもなれるものではありません、狂気に陥る以外には。

人は得られぬものを狂おしく求める。喪われるものをしか求められない。悲劇ですが、この悲劇なくしては人類の栄光の連綿もまたなかったのだという事実を認めないわけには行きません」

さすが騎士にして修道士だわ、と累紗楠は思う。

二人は隅で休憩し、他の者たちが舞うのを眺めた。だがそれも永くは続かない。累紗楠にダンスを申し込んでくる者の絶えるときがなく、次々若人たちに手をとられるからだ。彼女はメリーゴーランドに乗っているかのような心地がした。

疲れて繻子の張られた長椅子のクッションにもたれかかる。ふと見ると隣にいたのは叭ら蜜太であった。

「まあ、全然気がつきませんでしたわ、あなたでしたの」

しかし彼は考え込んでいて返事をしなかった。しばらくして驚いたように累紗楠の方を向く。

「これは。いまなんと仰いましたか。失礼いたしました。ちよつともの思いしております」

「いいえ、いいんです。でもなにを考えていらしたの」

叭ら蜜太は遠くを眺める眼つきになった。「不思議なことがね、少し。

昨晚のことなんですが、私はサンチュミオンに出向いて一泊しました。ええ、あのあたりで葡萄を栽培し、ワインを醸造する家々は蔵の一部を改造して買付者用の簡易宿泊所を設けているのです。ご存知のとおり名産地ですからね。実は騎士団における祭祀祝儀用ワインの買付は私の仕事のひとつとなっているのです。

私はサヲイヌ^テ氏（それが取引相手の栽培・醸造家の名です）の厚遇によつていつも一人部屋を用意してもらっているのですが、食事のときは旅のつれづれを慰めるため、大食堂でとることにしています。

そんなわけで私は例のとおり別棟（そこは収穫時期に臨時雇いの人間が食事をする場所でもあります）に入つて長大なテーブルの一つにつきました。

いつもに比べると人は疎らでした。薄暗い場所が余計に暗く感じられたものです。私は斜め向かいに自分より先に坐っていた男の様子がおかしいことに気がつきました。

外套のフードを被つたままで顔の左半分を隠すように前髪をたらしているのです。その髪は濡れたような濃く鮮やかな緋色でした」

「まあ、なんだか恐ろしいわ」

「ええ。でも逆に好奇心をそそられましたね。こちらは僧ではありませんが、帯剣した騎士でもあるのです。そう無闇に怖いものなどありません。

一つ声をかけてみることにしました。

『どうか、はじめにお眼にかかります。声をかけてみたくなりました。なにしろ、ここら一带のワインはイエルロ家が独占的に買い占めるものでね、同家の息がかかった業者以外会う機会もないものですから。もつとも我ら宗教関係者は唯一別格でしてね、イエルロとは無関係に取引ができるのです。』

イエルロ家のベネス人から見れば我ら羅教の宗教者など単なる異教徒にすぎないのでしようが、かといって経済を牛耳る彼らといえど、パリー人の国に住みながらその宗旨を軽んじるわけにもいかないってわけです。

そうでなくとも我々が羅教は南大陸系の民族一般に信仰される世界宗教です。我らパリー人はこのとおり北大陸に住んではいますが、ご存じのように元来は南大陸に発し、南北大陸間裂大洋を渡つて来たのです』

『よく知っていますよ。海鳥島から来たんですから。僕もパリー人です』

それはマルメディテラーノの中心にあるコリーダ諸島の一島の名でした。南北間貿易において最も重要な、海の最大中継拠点です」

累紗楠嬢が不服気に唇を尖らせたのを呟ら蜜太は見取った。

「いや、むろん、いうまでもないことでしたね。しかし、私がいいかったのは、それが稀なことだということです。で、思わず尋ねました。

『またなんと、数千kmの大旅行でしたね。まさか商用ではありませんまい』

『ワインの仲買なら、僕もやっています。他に羊やオリーブなんかもね。ただし商うのは島の中か、その近くだけです。お見込みのとおり商売で来たんじゃないやありません。でも関心はありますよ。しかしベネス人に独占されているとは知りませんでした。』

旧在の人間とは揉めないのですか』

『そりゃ揉めます。ただ経済界を彼らは専制していますからね、有力政治家も王侯貴族も非常に柔軟ですよ。逆にいえば貧しく迫害された者たち、たとえばブグドウ族やレアオシネ人なんかはベネス人には罪のない現象すら彼らのせいになっています。テロ行為さえ珍しくない。政府はしきりに取り締まりますがね。彼らを使って利益を図ろうとする有力な黒幕もあるらしくて、それはそれでなかなか簡単にはいかないようです。

もともとテロリストなんてものは、我々がパリー人の中にもいますけれどね』

彼は右眼と右頬とを寄せて曇らせ、黙ってしまいました。なにが気に入らなかったのか、表情が見えにくいだけに余計に判じかねましたよ。一方、周囲は主人の計らいで振舞われるワインのせいで騒がしくなってきました。お蔭で私たちの話声は却って人に聞かれにくくなったのです。

私は無意識に会話を紡ぎ出そうとしました。

『しかしながら（なにを以てしながらというのか、自分でもわかっていませんでした）当地の訪問は商売には向きますまい。我らパリー人の教会のみが特権で辛うじて割り込めるだけですからね』

彼は考えてから口を開きました。

『ええ、ですからそれは気にしません。そもそも旅の目的がそれではありませんから』

そういつてから彼はまた沈黙しました。そして再び『実は僕は』と語り始めたのです。

『エル・パツハロ・デル・マルの生まれではありません。彼の島に着いたのは二七一七年でした』

私はその年数に聞き覚えがあるような気がしました。

『マルシャル大公国がノルテの超大国シルヴィエの軍事介入を受けて瓦解した年、そして三十万人の難民が世界各地に離散した年です。僕の親類縁者一党は数千のパーリ人難民とともに、エル・パツハロへ渡りました。島には何千年も前からパーリ人が住んでいましたからね。』

しかし』

私は思い出しました。

『あの大量殺が起こったのです。アリアノ人の過激派に先導された原住民らが武装蜂起して無防備な難民キャンプを襲撃し、一夜にして数千のパーリ人が女も子どもも惨殺されたのです』

そうです。私もよく聴かされた話でした。海鳥島の大虐殺事件です。

数千年に渡る様々な民族の侵略によって蹂躪された歴史を持つ先住民族アリアノの異民族に対する怨嗟は凄まじいもので、噴煙を上げる火口のように常に潜在しているのですが、武力や経済力のない彼らの怒りは最も弱い者に炸裂し、最悪の悲劇を生んだのです。

私はようやく言葉を発することができました。

『あなたは生き残りなのですね』

『ええ。とっさに母親がごみ入れに隠してくれて助かったのです。当時はまだ四歳でしたから、そんなものにも入れたのです。他の家族は皆殺されました。僕は二日後に生存を発見され、島の修道院に保護され、育てられました。むろん、羅教です。そこは慈善院が併設されていたので、僕は読み書きを教わりながら自立できるまで面倒を看てもらえました。』

八歳から船荷の積み下ろし人夫を始め、数字に強い才能を商館の主人に認められ、十一歳で帳簿係の補佐に大抜擢されました。やがて商売を憶え、その四年後に修道院から独立し、事業を始めました。普通ならばかにされ、対等な取引なんか成り立たないところですが、僕を引き立ててくれた商館の主人が後見人となってくれたので、だれ一人軽んじる者はいませんでした。どうやら商才もあつたらしく、僕は仲買人として成功し始め、人も雇い、手広く商売する身となり、わずかの期間に大きな成功を手に入れました。

バグティオ氏、それが商館主人の名なのですが、彼の支援なくてはとてもここまではなせなかったでしょう。しかし、彼には商人らしい打算があつたのです。

僕の爵位です』

『爵位を』

『実は独立するまで知りませんでした。修道院を離れるに際して、院長の預かりとなつていた僕の荷物一式が、身につけていたもの程度ですが、返却されました。僕は家紋などから、父祖がマルシャル大公国の侯爵であつたことを知りました。院長も商館の主人も実はそれを知っていて、僕を厚遇していたのです。彼らは自分たちの恩義を言外に匂わせながら僕に爵位の復権を勧めました』

『なるほど、たしかに大公はモスコールに亡命しておられる。今回の旅はその復権のためというわけですね』

私はそれまで彼を平民と思い、自分も平民出の聖職者を装って、ざつくばらんを楽しんでいたものですから、少しづつが悪くなりました。と同時に半分彼の言葉を疑い、また彼が私を貴族と見抜き、本来なら軽率に告げるはずのないところを、あえて語り出そうとしていことを感じ取つたのです。

『コセイバ地方で起こつた内乱が国境を越えることを回避するためという口実と、隣国の国民への友誼という大義とを以て神聖シルヴィエ帝国が軍事介入したときに、国家の制度はシルヴィエの強制によつて共和制に切り替えられました。共和国會議は神聖皇帝の傀儡でしかありません。すべての貴族が爵位を剥奪され、その紋章や印は例外なく無効とされ棄却されました』

『しかし証明は難しいでしょうな。遺品程度では』

『遺品と修道院の記録簿の写し、そして院長自筆の証明があります。なにがしかの金品も用意しましたよ。生まれは貴族、育ちは学僧、生計は商人ですからね』

私はふと疑問に思つたのです。

『しかし独立されてから二年近くが経つようですが、随分間が空きましたね』

『商売を離れられませんでしたから。爵位などに未練する余裕はありませんでした。島は南北の大陸に挟まれた大洋の中央にあり、世界で最も重要な戦略拠点であり、最高の貿易中継拠点です。南北双方の支配が及ぶ領域の境界線上にあつて、世界の二大勢力の最大の接点です。巧く立ち回る者はたちまち億万長者になれますよ。僕のような生い立ちの者には名誉よりも實際が肝要だね。それにドミリーゴ院長やバグティオ氏の下心を知れば、

なおのこと爵位復権には嫌気が差しました。

それより貯めた金で武器でも買い、私兵を雇ってアリアノに復讐したい気持ちでしたよ。実際、二年前、独立して最初にやったことといえば、刺青でした』

『刺青?』

『ご存じかもしれませんが、エル・パツハロの羅教は北系に比べればかなり原初的です。青龍神を信仰することに変わりはありませんが、我々は信仰の証としてそれを体に彫るのです。僕は復讐の誓願のための刺青をしました。

だれよりも過激にやりましたよ。復活してしまったんです。胸のうちでは大虐殺への恨みや理不尽な残虐への憤懣や、不正への焦燥、そして欲得づくめの世間一般の人間たちに同じ残虐性が見受けられることへの逆上的な畏怖。あふれんばかりでした。怨霊のようなものが身内を奔流し、領し、自裂するかのように疾風怒濤していました。存在の不安が僕を襲い、自己を苛み、一切を否定し、忌み嫌って自滅的な欲求を做しました。

僕が刺青を彫ったのはまさしく自虐行為だといってよかった』

そういつて彼は薄笑いを浮かべ、被っていたフードを外し、濡れたような濃さを持つ緋髪をかき上げました。

刺青が顔の左半分を覆っていたのです。いや、顔ばかりではなく、鎖骨の上なる喉下から後頭部までその左側は**一柱の蒼い龍神が乱舞していました**。

蒼く彫り上げられた龍の図は彼の左鎖骨のすぐ上に赫く赤口を裂き開くところから始まり、長い龍首を喉仏左側にうねらせて前脚の爪を顎の左に広げ、鱗をぬめらせ胴を左頬に渡らせ、そのまま左脛を跨がらせては左の額に後脚を踏ん張らせ、くねる尾を後頭部左部に走らせている。当然、頭髮の左半分は剃られていました」

累紗楠が小さく叫んだ。

「なんてことなの。信じられないわ」

「そのような恐ろしい顔を私もはじめて見ましたよ。異様さを喻える言葉などありません。美しいとさえいつてよいほど凄絶でした。彼はいったのです。

『イ多しといいます。イ多し・イオアーノ侯爵です』

その夜、烈しい雨がふりました。

私は部屋に戻ってから考えていました。そして決心し、彼の部屋へ行ったのです。イ多しも一人部屋をとっていて隣でした。

私がノックすると返事にやや間がありました。

『呎ら蜜太ですよ。少しお話がありまして来ました』

彼は元のとおりフードを深く被っていました。

『どうしました、僧にして騎士なる伯爵。さあ、どうぞお入りください』

『イ多しどの、私はあなたにご協力できるように思う』

『復権に関する件ですか』

『そうです。あなたは大公カル・セクタイプト・マルシャルに請願するおつもりらしいが、彼とて被保護者の身です。身許引受人の許可なくば、大公に近づくことすらできないでしょう。外国人のあなたが関係者に信頼され、取り合ってもらえるまでには相当の時間がかかります。いや、有力なる保証人なくしては亡国の貴族の復権など不可能事かもしれません。

そこですが、現在、大法官官をしているアリス洲トスは私の叔父です。私が彼に紹介文を書けば、必ずや適確な法的手続きの便宜となるでしょう。ただし』

『ただし』

『その前に確認したいことがあります。あなたが爵位の根拠とする遺品のどれかを見せてください。それからいま一つ確認させていただきたいのは、あなたは爵位を得ることによっていまよりはるかに大きな事業活動が可能となり、その気になれば将来には一個大隊ほどの軍を組織することも難しくなくなりますが、いまだアリアノ人に対する報復を本気で考えておられるかどうか、という点です。つまり私はそのような蛮行を望まない者であり、それゆえにたしかめたいのです。

あなたが貴族の名譽にかけてしないといえ、私はその言葉だけを信じましょう。いかがか』

イ多しはフードを再び外して私の顔を凝視しました。

『お答えする前に、あなたのその親切の理由を伺ってよろしいですか、呎ら蜜太どの』

『底意はありません。ただ同じ民族の悲痛に対する同情です』

『わかりました。僕もそれを信じましょう。そして答は、いいえ、です。すなわちもはや復讐の意図はない。報復するのかといわれれば、報復はしない。アリアノは憎みますが、加害者は特定できず、また父母も姉も妹も戻りはしません。個人的復讐はしません。

これでよろしいか』

『結構です』

そうして私は彼に紹介文を渡し、城門まで一緒に来てその後、別れました。同行してや

ればもつと親切でしたでしょうけれど、今夜の舞踏会にどうしても出なければならなかったものですから、それ以上、手助けする余裕がありませんでした」

叭ら蜜太は話を終えたが、やはり気になることがあるらしく眉根を寄せて黙っていた。

累紗楠が少し唇を震わせる。

「けれど、イ多しの言葉を思い出してください。彼は『個人的復讐はしません』といったのです。復讐はしなくとも、なんらかの企みがないとは限らないじゃありませんか」

「そうです、それがいまにして気になってしかたないのです。それに」

「それになんですか」

「私は彼が家紋の入った遺品などを出す際に、その革囊の紐を緩めて大きく口を開かせたほんの刹那、その奥に封筒があるのを見たのです。それに使われていた紙がニグドレド産のものによく似ていたような気がしてしかたないのです」

「ニグドレド！」

「そうです、そうです、良質の紙を生産するシルヴィエ帝国の地方都市、あのニグドレドのことです！」

叭ら蜜太はそれをいうと、挨拶もそこそこにして席を立った』

イ多しは彼の著作において累紗楠との恋愛関係を逆転させて空想し、現実において再解釈を実現しようと考えていたようで、彼女をデートに誘ったのもそんな時期だ。だから最初からつき合い方がどこか異常であつたはずである。そのあたりのことを知ったかったのだが、なんとなく別れたなどと軽くかわされてしまった。イ多しの意趣が想像できなければ（誰ができようか？）、なにが起こっていたかわからないまま、ともかく自然別れてしまったという感覚しかないのも当然といえる。

私はその夜、累紗楠のためにタクシーを拾って謝礼を渡し、別れた。

「また取材させてください」

翌日、イ多しの実家に電話をした。彼の母親と話をするためだ。私は以前から貞観正國寺の墓地にあるイ多しの墓への墓参り撮影との許可を求めていた。しかし断られ続けている。そのときもまた同じお願いの電話だった。取材そのものが断られていた。子息に十七歳で変死された両親の心情を推し測れば無理もない。待つしかなく、その日も話は進捗しなかった。

そのまた翌日、私は累紗楠に連絡して会う約束をする。電話を切った後、自分でもなにをしているのかよくわからない気持ちだった。その後も同じバーでなんとか会い、イ多し

が愛した女性に恋し始めている自分を感じた。彼女の好意も感じられるような気がしていたのである。楽天家だな、自分をそう批判してわざと苦笑を作り、後ろめたいような重苦しいものを紛らわそうとした。イ多しの嫉妬が私を圧迫しているのだ、と胸中で独りごちる。累紗桶に会う日の出がけに玄関でつまずいて良質の革靴のかかとをふみつぶしてしまったり、路上で拾おうとしたタクシーに無視されたり、小銭を落として紛失したり、思った歩数で店の入口まで到着できなかったり、スツールに坐りそこねたり、手を滑らせてグラスを割ったりすると、これは実はイ多しの呪いではあるまいかなどと思つて、やはり自分に向けて苦笑を作つてみせた。

愛は自己より深い。各個人の精神において、その存在を肯定する最も強い心情的な根拠となる。また愛情とは家族の愛や男女の愛に顕著にその威力が見られるように、子孫の繁栄、種としての存続に深くかわかるため、その衝動はときに個人の生存を超える。家族や恋人のために身をも滅ぼす激情に囚われるのは、こうした理由からだと思つ。

エクスターゼ論に絡ませて、イ多しも『モスコクール』の中で愛について叙べている。私は恋敵としてのイ多しに対峙するかのようにそれをなんども読み返した。日中でもそのくぐたりが髣髴する。いつも、たとえば歩いているときなどもモスコールの石畳が眼前に浮かんできくるのだ。

貞観正國寺の住職、すなわち叭ら蜜太の父親により寺を自由に見学できる許可をもらつて以来、私はしげく訪れるようになるのだが、寺にいるときほど強くモスコールに襲われるときはなかった。イ多しが脳髓に浸透したかのように、彼と一体になって歩いている気がする。彼が生きていた現実と重なるとき、彼がモスコールにかけた意味をおぼろげながら知るようになった。

現実が複数の意味、複数の解釈を露わにし、その奥行きを深めるとき、晰らかさの強度が益し、現実性が強烈になる。真実性が炸裂度を増す。リアリティの明晰度に脆弱な諸概念が払拭される。一切がなに者でもない、ただの現実になる。

人間が予測し得る限りにおいて客観性の極限は無を意味する。客観性の極限は脱自態の極限である。極限的脱自によつて主観による将来への不安や期待が絶滅し、時間性において構築される『存在』は滅ぶ。現状の我々にとっては『無』だとしか考えられない状態になる。

すなわち考えられる限りにおいての究極のエクスターゼとは、現状の我々の実存的解釈においては無のことなのだ。

彼は複数の解釈によってリアリティの明晰度を炸裂させ、一切を斥けた涯にあるエクスターゼに切迫しようと考えたのだ。

叭ら蜜太の日記の中にこんな記述があるのも驚くにあたらない。

『奴は茅葺の山門をくぐるとき、扁額の掲げてあるあたりに二匹の龍神が向かい合って後脚で立つ龍紋があるという。』

畝邨に限らず真神郡一帯には龍神信仰が昔からあるが、奴がいつているのはそのことじやない。

手水舎を見れば、それが場末のバーだという。扉（そんなものはどこにもないが）を開けると無愛想に迎える亭主は汗ばんだ胸毛の覗くチュニクの上によれてボタンの外れたチョッキ、髯もじやで太鼓腹、太い指までも剛毛の大男だという。奴にいわれるとういうわけか、脂じみた袖にすられて黒光りしたカウンスターが眼の前にあるような、そんな気がしてくる』

私は追体験するために空想を廻らせる。昼間でさえ薄暗い堂内の沈とした静寂を歩み、それがまた洞穴のように真夏をもひんやりとさせるモスコールのバーの雰囲気を連想し易くする。

すなわちそこにある、金碧の襖絵や欄間の複雑緻密な透かし彫りや黒漆の調度に青貝細工の装飾、それらを眺めることのリアリティが深まって行くほどバーの煤けた太い梁が実在する。実在するこの店ならば船の着いた直後には道端にまで人がはみ出るが、いまは数人の土地の者しかいないという現状が出てくる。

河岸で荷物運びを終えた褐色の人夫らに無精髷のサイコロ師が話しかけているではないか。

腕に刺青の人夫は振り向きもしない。眼の尖った野菜売りの若者は寡黙で、頭に布を巻いた漁師はご機嫌、お喋りが止まらない。遅い昼飯の厳つい皮鞆スーク職人が市場で売り尽くした狡猾そうな壺売りの独り笑いを胡散臭そうに横目でにらんでいた。

節穴のある木床にはパンくずやチーズの欠片が一杯だ。エールも零れていた。腸詰の皮の硬い部分やハムに混ざっていた軟骨などを老いた客が吐き捨てている。

「ハヴィーゴをくれ」といえば、店主が反った細いナイフで肉塊を薄切りに削ってくれた。牛肉は甕の中で塩漬けにされている。冬になれば香辛料入りの温めたワインがたくさん売れた。

大法務官の屋敷を辞して後、一杯あおっていたイ多しは銅銭を払い、出る。ここいらの

路地は狭くて垂直壁の峡谷のように日が射さない。建物の高さに対して道幅がなさすぎるのだ。かくも暗く切り立った狭間の奥尖に、聖オーヴァン大聖堂の西正面の一部が異様に迫って聳えている。

日照に燦然たる屋根が高さ六十メートルを超える身廊を屹とさせる大建築であった。周囲の石造物が狭まって建てられているため、巨魁さが唐突で縮尺の異なる図が切り貼りされたかのように見える。

小尖塔を持った柱状の扶壁が列し、身廊より一段低くなっている側廊の壁へと半アーチ状の飛梁を跨がらせ、間接的に身廊の推力を支えている。扶壁全体に精緻に施された彫刻が遠くからはレースのように映え、それが列するさまは雪の結晶からできた針葉樹林を思わせた。

南正面に廻る。広場があり、その隅に一群の人だかりがあった。粗末な身なりの子どもたちと同じく粗末な修道服の女たちとが立っており、いく人かの人々が彼らを囲んでいるのだ。

こどもたちがブグドウ族の難民であることは、皮膚の色や顔立ちから晰らかであった。イ多しは苦い思いでそこに立ち止まる。女たちはベネス教の修道女たちであった。小さな箱を持っており、箱には『聖リユヴォリオ慈善院』と記されている。イ多しはそれが家族を失った難民のこどもを保護するベネス教の修道院の付属施設であり、こどもらのために募金を集めているのだと悟った。

ベネス教はその名のとおりベネス人の宗教だが、この呼び名はベネス教徒以外の者が使う呼称であり、ベネス人はただ宗教としかいわない。世界に宗教も神も一つしか存在せず、すなわち名称で区別する必要がない、というわけだ。そしてこの見地からすべての宗教を認めている。異なるのは見かけだけで皆同じ神を信仰していると見做し、逆にいえば異教徒の存在を認めない、あり得ないという考え方を公的にはしているのだ。

イ多しは冷笑した。ブグドウ族の難民が土地を追われたのは、彼らの土地に燃える黒い水が湧くからである。いままでほとんど価値を見出されなかったその水が最近注目を集めるのは、シルヴィエが世界ではじめて自走式装甲戦闘車輛の開発に成功したためであった。その燃料が燃える水を精製したものから作られているのである。ベネス人が眼をつけないはずがない。彼らがモスコールの勢力圏にあったブグドウの土地を傭兵を以て略奪したのは起こるべくして起こったことであつた。

太った修道女の手を抱かれていた幼子が突然、母を呼んで泣き叫んだ。

イ多しは懷から財布を出し、修道服を着る者の中であた一人、白皙碧眼をした金髪女の箱に紙幣を入れた。なぜシルヴィエ人がいるのかを不思議に思ったのだ。彼はこういい添えた。

「科なくして不幸なる者たちへ」

女はお札の辞儀とともに微笑し、半分が隠されたイ多しの顔を見つめた。強く眼を睨みみひらている。大聖堂のファサードに燃える薔薇窓のようだった。

「いいえ、親切なお方。不幸ではないのです。彼らは神に愛されています」

「だとすれば、神の愛は人には計り知れません。罪のない子らがこのような哀しみに遭うようでは」

「真実は神にのみあります。いったい、束の間の生をあえて哀しむことにどのような意味があるのでしょうか。愛され満たされた歓びの気持ちと、愛し、広がる肯定の想いとを得ずして虚しく人生をやり過こさねばならぬいわれがどこにあるのでしょうか」

イ多しに怒りが込み上げた。

「なるほど、生きている者はそれでもよいやもしれぬ。しかし虐殺された者らの無念をいかにすればよいでしょうか。愛し愛された者たちが罪なくして殺戮されたならば、あなたはどうされるでしょうか。」

悪逆が裁かれずに、復讐が果たされずして、魂を裂く苦しみをどうすればよいといわれるのか」

「復讐をお考えになるならば、それが死者に報いると信じられる根拠はどこにあるのでしょうかとわたしは問います。それが復讐者の心を癒すがためだけでないとうしていえるのでしょうか。あなたのいわれるようなことで、無辜の死が償われるのでしょうか。」

「いったい、人になにができればようか。人はただ神の創りたもうたままに幸福を求め、苦しみからの救いを希うのです。そこに答えを探してもなにも得られません。ただおのれ一人の心情を超えて、神の御心のままにあらんと努める、それしかなく、人が人を裁くことなどできるはずがありません。」

それ以上のことが考えられましょうか。

わたしは信仰するのみです。至高なる神の御心になかなわぬことなどは起こりようがないのだ、と。ひたすら神に祈ります、なにも望まずに。必要とすべきものなどありません。

神は全能です。神がすべてです。それが信仰ではないでしょうか。この世には罪も背教も異教徒も、神の御名を冠した諍いもあり得ないのです。神ゆえの永遠の平和があるのみ

です」

まっすぐ見据えるその、青や蒼や碧や水色や藍や紺の燦めきをモザイクにして鏤めたステンドグラスのような双眸の光芒がイ多しを射抜いた。胸をすくような、強く、それでいて清らかな衝撃を覚え、戸惑う。喉を動かしてから、ようやくいった。

「ふ。神に全能を措定することこそが愚かなる思い上がりですよ。しかし思い上がりずしてどうして生きて行けましょうか。

いや、いや、まあ、それはどうでもよい。あなた方にいっても、到底、わからないでしょう。ともかくもご立派です。

そうです。すなわちあなたは悪行を粉砕せぬといわれる。なるほど、過去の事件については、それもあるかもしれん。だが未来に向かってはどうか。悪をなし続ける者を放置し、将来に禍根を残し、知らぬ存ぜぬでよいと仰られるか。ふふん。素敵ですね」

イ多しは冷静さを取り戻し始めた。こんなところで揉めても意味はないのである。「では失敬」　そういつて立ち去りかけた。だが二、三步で彼は身を翻した。

「ときにあなたはシルヴィエ人のようにお見受けするが」

「そうです。わたしはエレミタです」

イ多しは合点した。エレミタ派はシルヴィエ聖教の異端であり、その教えはベネス教に相似しているため、聖教絶対主義の宗教国家である神聖帝国で迫害され、各地に散っている。

「わかりました。わかってしまえばおもしろくもなんともない。では、これでほんとうに失礼します」

「あなたに神のご加護がありますように」

イ多しは聖リユヴォリオ慈善院が窓から見えるホテル・リノの部屋に入ると、贅沢なソファに身を沈め、美しいシルヴィエ少女のことを想起し、名まえだけでも聞いておくべきだったと省み、思いに耽る。「天国の美を征服することは、大きな悦びだ」　彼はそう独りごちた。

一時間後、彼は懷中時計を見て着替えを始めた。大務官アリス洲トスの内輪の夜会に招待されていたのだ。そこでまた呌ら蜜太を交えて話し合うことになっていた。

ささやかな内輪の夜会には入れ代わり立ち代わりで礼服やら正装の軍服やらの数十人の

名士が訪れ、その中には父親に同伴された累紗楠もいた。

叭ら蜜太は尋ねるべきか思いあぐねながら異国風の礼装をしたイ多しの様子を窺っていたが、ターバンと化粧とで刺青を隠してさえもわかる彼の表情の変化に気がついた。イ多しをひとめ見てさらなる好奇を駆られ、紹介をせがむ累紗楠と彼女に添う父伯爵とを伴いながら、叭ら蜜太はいう。

「気にかかることでもおありですか」

イ多しの微笑は冷笑的であったが、先日とは変わって自信のなさが見受けられた。

「いえ、別に。ああ、それとあなたは、ベネス人の聖リユヴォリオ慈善院に一人のシルヴィエ人がいることをご存じですか」

「それは、キイイのことでしょう。着いて早々、随分お眼が利きますね。彼女はエレミタですが、むしろヴァルゴ教徒が崇める美の女神のようです。不幸な女ですよ。もしシルヴィエ人でなかったならあの美しさです、当然人々の同情を集めていたでしょうに」

金の刺繍をした襟、首に巻きつけた絹繻子を高く盛り、カフスのない代わりに腕輪をいくつも重ねた手首、丈の長い颯爽とした上着姿のイ多しを憧憬の眼差しで眺めていた累紗楠が不満げに唇を結ぶのを見て、叭ら蜜太は喋りながらも眉を顰める。

彼女は憂鬱な気分に分われていた。自分でもどうして黙っているのかわからない。なにもかも窓の景色のようで、想いに過ぎるだけだった。

叭ら蜜太が語り続けている。

「いえ、なんでもキイイの父親は彼の国では高名な大学教授（たとすれば恐らく宗教者であったでしょう、あそこではすべての学問は宗教からの派生としてしか捉えませんから。ただエレミタではなかったようです）かなんかで、枢機卿の諮問機関の委員にもなる人物だったらしいですが、論文の一つが異端だと糾弾され、異端審問にかけられる決議が下され、家族をともにして逃亡したらしい。いや、事情はよくわかりませんが、どうも前から帝国に批判を抱いていて亡命先を打診したりもしていたようですね。もしかしたら訴えのほんとうの理由はそれかもしれません。シルヴィエは背強者の存在を公の場では認めない国家ですから。

ある程度ルートも作ってあったのでしょう、辺境地帯の苛烈な自然の中で幼いこどもを連れながら、かなり巧く逃げ果せていたらしいです。しかし彼は国境駐屯部隊に射殺されました。酷いものです。異論を唱えただけで自国民をそう簡単に殺してしまうとは。ええ、

なんでもエピタスク（モスコールとシルヴィエとの領域が接する山麓の森林地帯）のあたりだそうです」

累紗楠はイ多しの表情が深まったことを見取った。きつく細められた眼が昏く光っている。小波の反射のようにその光を揺らしながらも、貫き徹するような過酷が底に厳としてあった。胸が苦しく高鳴るとともに、彼の変化がキイイのためと想う。

「たぶん父は犠牲になったのでしょう。キイイはまだ四歳ほどだったはずです。彼女と彼女の母とが難を逃れられたのは、そうだからとしか考えられない」

「すると彼女は父親の死を見たわけですね」

イ多しの口調が彼女の胸を突く。普段なら涙して同情するであろう、しかしこのときは違った。『不公平だわ。キイイはずるい。そんなに不幸だなんて』 理不尽だとはわかりながら迸る。どうしてこんなに意地悪なのか、これはつまり。累紗楠は眼をぎゅつとつぶった。

「恐らくはそうでしょうね。で、追跡を逃れたものの、その後の逃亡はかなりつらいものだったらしい。

二人がモスコール郊外の農夫に発見されて助けられたときには衣服は破れ、悲惨な状態だったようです。身体的にも精神的にも。母親はその夜亡くなりました。衝撃が命を裂いてしまったのでしょう。高熱のためというよりは、魂を喪失したために死んでいったかのような感じでした。

キイイは聖リユヴォリオ慈善院に引き取られました。他に受け手がありませんでしたから。彼女がエレミタになったのはそれからのようです。ベネス教と矛盾しない教義ですし、母がエレミタだったのです。どういう心の経緯があったかまでは、だれにもわかりませんが、エレミタになるには、なんの儀式も所属の必要ありませんからね。自らがそう信仰する、そのみです。かような宗旨ですし、またかくの如くでなくば峻烈な聖教世界ではすぐに殉教者の屍で山を做して消えてしまっただけでしょうから。

そんなわけで珍しいシルヴィエ国外でのエレミタの誕生となったわけです。彼らは性格上、弾圧を受諾し、迫害を避けることをよしとしませんから」

しばし硬くなって黙っていたイ多しが吐息し、涼やかに笑う。彼女はそれを偽装だと決めつけて彼を少しにらんだ。イ多しは知らんふりをしている。でも彼はわかっているんだわ、累紗楠はそう想う。

「いや、とても胸抉るお話をうかがいました。彼女の魂に平安あれ。いくらシルヴィエ人

であるといえども、そう祈って上げずにいられないですね。いやいや、詩劇のようなお話でしたよ。感動しました。

さてところで」

やがて夜会に遅れてやって来た外務大臣とアリス洲トスが話をし、その場でイ多しの爵位復権に関して進捗が得られる。その旨が彼本人に告げられた。

彼女は告知に動揺する。どうして自分が動揺するのか自問することさえ思いつかなかった。イ多しとふと眼が合うとその双眸に感じ、喉をなにかがせり上がる。心臓を衝撃され、累紗楠の耳には胸の動悸が鳴るばかりで音が聞こえなくなった。

彼が黙礼し、旅の疲れを理由に退席する。未来の侯爵の後ろ姿を坐ったまま見送り、溜息を吐く。

「想像していたのと全然違う。冷静で思慮深くて、怖いような、でも切なくて。そうよ、これって恋だわ」

イ多しは辻馬車を呼び停める。車内には既に一人の男が乗っていて彼を待っていた。

「おれがリザドだ。イ多しだな？」

漆黒の長髪を波打たせ、日焼けしたブグドゥ族の男が名乗る。イ多しは無言でターバンを外し、絹繻子で白粉をぬぐった。リザドがひゅつと口笛を吹く。

「噂どおりだな。まるで化け物だ」

イ多しは口を利くつもりもないといわんばかりに革囊から金貨数枚を出した。「たしかめる。これが袋一杯に入っている。前金だ」

リザドが齧ってから眼を細めて眺める。「上等なマールロの金貨だ。よし。商品は船に積んで一週間後に渡す。水夫を九人つけるから、おまえはそのまま河を下って大洋にまで出ればいい。

そのとき全額を支払ってもらおう」

「全部が最新式だろうな」

「あたりめえだ。シルヴィエ製の速射機関銃に、自動装填の短銃、後装連発銃、迫撃砲、後装速射砲、これだけそろえりや、小さな王国ならぶつ飛ぶぜ。どこの国も弓や剣で戦争しているんだ。南大陸の超大国マールロ^{スール}でさえ、せいぜい前装単発銃や前装砲ぐらいじゃねえか」

「税関や検問には手を廻してくれるんだろうな」

「当然だ。おまえは世界革命の宣誓に署名したんだ。シルヴィエの連中も認知している。おまえらが思っている以上に、聖教徒らの手はおれたちのような義侠を助けるため、国境線を軽々越えてあちこちに伸びているんだ。エル・パツハロ・デル・マルがその革命の最前線になる。おれはおれで、ブグドウの土地を奪って燃える水を独占しやがった薄汚ねえベネスども、虐殺者どもへ正義の報復をする。」

イ多しよ、いわばおれたちや同志なんだ」

蔑みの眼差しを向けるのみで、応えなかった。リザドが肩をすくめ、降りようとする。

「じゃあな、侯爵。わるいがおれはまだ仕事あるんだ。祭りさ」

リザドが去ってから走る馬車の中で、イ多しはつぶやいた。

「革命など成就するものか。欲情する虐殺者が虐殺され、新たな欲情が謳歌し、また報復されるだけだ。意義など欲情のまとう奢侈でしかない。所詮、人は死すべき人間なのだ」

イ多しはその夜、高価な酒瓶の封を切り、達成感にあふれながらも眠れなかった。翌朝、聖リユヴォリオ慈善院を訪れ、キイユを呼び出し、こういった。

「先日は失礼いたしました。僕にも難民であった苦い経験があつて、つい感情的になつたのです。そのお詫びのため、そしてかつての僕と同じ難民らのために多額の寄付をいたしたい。しかし人に騒がれたくないので夕刻僕が逗留しているホテルの部屋までだれにもいわず一人で来て欲しい」

彼は刺青を見せてすべてを告白した。キイイが同情を込めて晴を震わせるのをイ多しは満足げに眺める。彼は優しさの奥に嘲りを含んだ眼差しで処女の蒼碧の双眸をじつと覗き込んだ。自分が高潔な精神からキイイに一人で来て欲しいと申し出るのだということを彼女が信じ込んだと確信し、ゆつたりとした笑みを浮かべる。

「さあ、ではお待ちしています、僕を落胆させないでください」

彼は用が足りると足早に慈善院を去った。

日がようやく暮れ、香水を身に浴びせて窓から下の通りを見下ろしつつ待つ。やがてキイイの姿が見えた。彼女が部屋に入るなり、イ多しはわざとらしい乱暴さで華奢な手を取り、耳に唇を寄せて囁く。

「さあ、もうおわかりでしょう。僕はあなたの美を指輪にしたいのです。おや、このような愛情はお嫌いですか。しかたない。キイイどの、あなたの抵抗性が人生の魅惑を継続させるのです。無意味を意味ありげにするのです。お顔を背けられるか。いやはや。」

さあさあ、あなた方はどうしてそんな鬱陶しいことばかりが出来るのです。数千年に渡

って努めてきながら、僕ら人間にはなにも得られませんでした。試練だとするならばあまりにも永すぎる。成果を要求することがどうしてやぶさかなのか。

僕はあなたに魅了された。それだけで充分だ。たとえ十分後に飽いたとしてもね。刹那主義じゃない。刹那よりも短い。

あなたにそれを非難する権利などない。あなたの双眸こそがどんな刹那よりも瞬間の強烈を持っている。

その眸から光芒を放射する虹彩の蒼碧の燦爛、過剰なるリアリティです。あまりに晰らかで、かつ炳らかです。無限の透明感は把握が不能で、ゆえに全世界を做します。

どうして僕が人として進めぬことができませんようか。できない、惑溺し、酔い痴れたい」裏切られた愕きでキイイの晴が震え、唇がわなないた。

「あなたは、なんという恐ろしい冒瀆をいわれるのですか。いいえ、離してください。ああ、騙したのですね」

イ多しはもの憂く贅に飽いた微笑をする。

「むろん、人生とは詐欺ですから。虚無ですから。すべては生存のためにでっち上げられた架空、だれもなにも説明できない。なぜ虐殺が赦されるのか、罪のない者が虐殺されるのか、なぜ僕らの肯定は愛する者の死で喪われるのか、なぜ異逆なくしては生存がかなわないのか。

なぜ虐殺者が裁かれないのか。むしろ、僕らが間違っているのではないか、僕らの価値観は顛倒しているのではないか、非現実的ではないのか、現実迎合すべきなのか。

なにをどういおうがいずれ、無為だ。妄想でしかない。無為が有為とでも想わなければ救われない。

歴史を顧みれば現実を変えようとした人々が観える。しかし民衆の革命も信仰の勝利も大いなる善政も崇高な自己犠牲も虐げられたる者たちを救う正義に貫かれた戦いも、成し遂げられた当初の感激はその純粹をじきに腐らせ、生まれたばかりの情熱もあれやこれやに紛らわされ、各々の欲望によって濁り見失われ、エントロピーを増大させ、やがては従来の現実となり果ててしまう。

無駄なのです。世界全部を変えてしまう以外は。

しかしいったい、どうやって石を樹木に変えるのか、どうやって死者を甦らせるのか、横変死した者の人生を幸福だった人生にどうやって戻すのか」

そのとき爆裂音が街を揺るがした。「なんだ、これは」イ多しがうめいた。

窓の外に濛々たる煙が上がっている。聖リユヴォリオ慈善院が炎上していた。彼は眼を奪われ、その隙にキイイに突き飛ばされ、外へ逃げられる。

イ多しは舌打ちをし、それが祭りであることを悟った。

翌日、新聞をとり寄せ、被害の惨状を読む。

テロ行為だと書きたてられていた。大量の燃える水がなに者かによって持ち込まれ、火を点けられ、爆発して燃え上がり、慈善院は半壊、ちょうど夕食の時間であったため、食堂に集まって楽しみにしていた子どもはブグドウ族の孤児らを含め、全員が判別不能の骸となり、窒息死、若しくは焼死した、と記事にされている。大人の死傷の状況は修道女三名が重傷、雑役婦一名が軽傷で、他諸々五十二名が死亡した。

彼の頬が歪む。青龍の鱗も扁平なかたちになる。

リザドらはかわいそうな難民の孤児らを、彼らと同族の子どもたちをも虐殺したのだ。世論は騒然とし、各所で抗議集会が自然発生した。警察は捜査官を大幅に増員し、街にはあちこちで噂が飛んだ。

イ多しはキイイを捜しに街を廻った。ブグドウ族の日雇い労働者がベネス人と思われる青年らの暴行を受けた噂を歩きながら耳にする。

また、ハリ人をはじめとする各民族の一部がベネス人の聖職者と一緒になって暴行事件に抗議する集会を見かけた。ベネス人の野次馬数人がそれを激しく罵倒している。

元老院議会が召集され、王が異例の声明を発表したことが夕刊の一面に載った。彼は大法官の晩餐会を体調不良と偽って断り、深夜まで彼女を捜し続ける。ホテルに戻って窓から夜明けを眺めた。

正午になった。

イ多しはその号外をつかみ、大法務官の許に寄ってからその足で裁判所に駆け込んだ。被疑者が捕らえられ、早くも裁かれようとしている。

嫌疑は事件当日その時刻に限って慈善院にいなかった唯一の内部関係者、そしてシルヴィエ人であるキイイにかけられていた。

彼女の無罪を証明できる者は彼しかいなかった。しかしイ多しが急ぐのはそのためではない。無駄なのだ。求められているのは真実ではない。報復だ。そして自分たちの明日の安全を確保することだ。

キイイのようにシルヴィエ人の場合、検察に狙われてしまったらまず助からない。モスコクールではシルヴィエ人に控訴権がない。検察官の公訴と裁判官の判決のみで一切が決

する。

この措置は、モスコール王がシルヴィエ皇帝に対し、マルシャル大公国を正統なる統治者の支配に返さない限り国交を断つと宣言したことに起因していた。

そもそも神聖帝国は北大陸の八割以上を領土とし、なおも野心を抱いて大陸全土を支配せんと企み、大義名分を造っては侵略を繰り返し、他の全民族から忌み嫌われている。権利の制限にはこういった民意を暗黙に反映するという意味もあった。

またブグドウ族の過激派をシルヴィエが支援していることは公然の秘密であり、彼の帝国が各国の過激派と連繋してこれを世界戦略の一つとしていることも知られている。本件に関するシルヴィエ人への公訴は実に理にかなっていたのだ。

イ多しには証言する気などない。キイの無罪を証明することはリザドへの間接的な裏切りであり、最悪の場合には死を招きかねない。だがともかく急いでいた。彼自身にもわからない衝動で、それはあたかも、なぜ無があるのではなく存在があるのかと問う問いに答えられないのと同じであった。

彼はアリス洲トスの権限を活かして満杯の傍聴席の一つを確保していた。古代様式の円柱が列する正面大階段を上ろうとする。同時に馬車から一人の女性が降りた。累紗楠だった。

怒りのような哀しみのような表情が紅潮した顔にあらわれている。なじるようにいった。
「来ると思っていたわ」

イ多しは驚いた。

彼女の気持ちを以前にも感じてはいたが、深窓の令嬢が一人で出歩くなど考えられなかったし、しかもその上で公共の場所において男性と対面するなど大胆不敵にすぎる行動だったからである。黙ってしまった、というよりはなにもいえなくなってしまった。

「イ多し、いいえ、侯爵、あなたには、もうわたしの気持ちがわかってるのよ。そうよ、あなたは」

「お嬢さん、待ってください。あなたは、いったい、なにをされようとしているのですか」

「罪のない幼子の命を奪うような女であっても、悲劇の麗人というだけで、ああ、あなたはそんなに心かき乱すのですか。あなたのような人が！」

「いったい、自分のなにが彼女にわかるのかと胸中でうなる。

「あなたは勘違いしておられる。それに彼女は無罪だ」

「まあ、なんということ。あなたは恋に眼を蔽われています」

「いえいえ、そうではありません。僕はあの時刻、彼女と会見していたのです。僕しか知らない事実です」

「二人だけでお会いになっていた!」

累紗楠の耳にはそこしか入らないようだった。

「もしキイイさえいなかったならば、わたしたちも違っていられたのに」

彼女の涙眼を眺める。

「あなたは素敵だ。僕は会ったときからそう想いましたよ。魅惑的です。しかしあなたは僕に恋した。幻滅です。それにあなたの生命は躍動している。生の輝きそのものです。地上の旺盛がその膚に生まれたばかりの芽のような初々しさと脈動とであふれている。匂うかのように柔らかで、活発でいて繊細、いまにも喪われそうなくらい妙なる美しさを湛えている。

だがそれゆえにあなたは見ていない。ご自身に蔽われてしまつて。いや、そうです。蔽われているのはあなたです。もし僕が虐殺された人の子でなければ、すべてが変わっていたでしょう。あなたも僕になど興味を示されなかったでしょう、欲望を起こされなかったでしょう。だれでも自分のためにしか生きられない。地上を生きる者ならば。

言葉が汚いのはお赦しいただきます。どのような事実も人の望みに異逆するのですから。そうです、欲しいものとは常に手に入らないものでなければならぬ。僕にはそれが家族でした。失敬」

彼は階段を駆け上がりながら心躍り始めていた。どうせ累紗楠にいつてしまったのである。ぶちまけて公衆を嘲つてやろう。精巧な兵器を楽しむより快いのではないか、そう考えた。最高法廷の巨大な扉の前で顔の被りを直す。警備が開けてくれる。

間に合った。騒がしい人々をわけて傍聴のための貴族席に坐る。

廷吏が開廷を叫んだ。一同が起立し、パリー人の裁判官たちがあらわれた。裁判長が被告の出廷を命じる。キイイが出て来ると傍聴席に一瞬、男たちの溜息が洩れ、思い直したかのようにすぐに罵倒が沸騰した。

裁判長が槌を打つ。被告席に立つ彼女に対し、姓名と年齢と職業と出身と宗旨との確認が行われた。裁判長が尋ねる。

「起訴状は読んだかね」

キイイが頷く。書記が起訴状を読み上げる。それが終わり、裁判長は彼女に服罪するかどうかを問うた。

「いいえ。わたしはその時刻、さる方が寄付の申し出をされましたのでその方の許におりました。この恐ろしい事件のことは」

彼女は少し涙ぐんだが、唇を強く結び、いった

「この酷い、非人道的な仕打ちについてはなにも知りません」

検察官が質問する。

「その寄付を希望した者の姓名と住所とは」

牛イイは強い眼差しで応えた。

「その方のご希望でいえませんか」

法廷がざわめいた。検察官が笑みを浮かべていう。

「結構です。これですべて晰らかとなりました」

彼女が屹然と立ち上がって静かな、しかしよく通る声でいう。

「それはどういうことでしょうか」

検察官はわざと嘲るような微笑を作っただけで応えようとしなかった。

裁判長が再び槌を打った。検察側の論告が始まった。そして最後に被告の自己弁護が許された。裁判長が念を押している。

「もし罪を認め、服罪の意思を示せば、死刑の判決が下された場合でも斬首刑とされるが、飽くまで無罪を訴え、その上で死刑が決められた場合には、被告は火刑に処されることになる。これをあらかじめ告げおく」

牛イイは毅然と背筋を伸ばし、凜々たる表情をした顔を大理石の像のように神々しく輝かせ、蒼き燐光の双眸を炳らかにした。

「わたしは神に誓って無実です。すべての人々の上を慈愛と真理との光で照らす、聖なる神に誓えます。」

わたしがシルヴィエ人であるというのみの根拠で、帝国の世界侵略の一環としてベネス人の慈善院にテロ行為を行ったという論告は、残酷な冤罪です。どうしてもあのこともたち過日のような惨たらしい死を与えることなど考えましようか。

しかしわたしにはわかります。あなた方の眼は既にシルヴィエ人への断罪の業火で燃えている。過去よりいままでいく人の人たちが陋劣のために斃れたでしょうか。虎が兎を餌としか思わないように、欲望や恨みや憎悪や憤りや哀しみ、それらが人をしてその殻に封じ、神の導きたもう聖なる光輝の道を閉ざすのです。

しかし」

彼女は言葉を切った。勇気を奮うかのように肩と喉とを震わしてから語る。

「またそれが神のわたしたちに与えたもうた試練、生き残った者らや斃れた者らがより高く未来へ羽ばたくがための障壁、助走、或いは圧縮なのでしょう。

神のたぐいまれなる御心は成就されん。

さあ、結構です。あの子たちがあのように死したのに、わたしがそうなつてはならない特別なわけがあるでしょうか。けれども自分だけが無事でいられるのは不公平だといえ、だれしもその考えを過ちというでしょう。わたしは神のなされることに無為はないと応えるのみです。それを理解してもらえずとも、それはそれでしかたがありません。わたしはただ、なされるべきを為す。そして自分の思うところを叙べます。

わたしはエレミタ派です。有価を拒む者です。敬虔に、御心のままに信仰し、身を捧げる者です。わたしは極刑を懼れて自己を弁護する者ではありません。

死を懼れて神を否む者ではない。

いったい、死とは懼れるべきものでしょうか。人が死を怖れるのはそれが終わりだからです。けれどその考えは間違いです。なぜならば死は終わりではないからです。人間は終わりに向かって生きているのではないのです。死は終わりではありません。わたしが死んだ後も世界は残ります。屍骸が腐敗し、散り、もはやわたしの意識がなくなる、ただそれだけのことです。

たとえ名声が残っても、人類が滅びれば思い出す者もいなくなる。しかし世界は生存し続けるのです。自己に籠る者は死し、自殻を破り裂いて世界へと超越する者は永遠を生きる、不死を生きる、たとえ死しても。

しかし永遠がなんでしょうか。無常であることを哀しむゆえんも、永遠を欣求するいわれもない。この世で無為とされることにも、たとえ無為の死であっても尊い有為がそこにはあるのです。

人にあるべきは信仰のみです。

わたしは服罪しません。偽りはできない。しかし神の恩寵を感謝し、謹んで人の与える刑を受けます」

裁判官らは退廷し、十分後に戻って火炙りの刑を宣告した。

イ多しは席から立ち上がる。

「裁判長、しばしお待ちあれ」

だれもが安然とし、呆けたように眺めた。裁判長は眉を顰めながら口を開きかけ、廷吏

が動こうとする。それを制すが如くにイ多しはまくし立てた。

「疑うのは勝手ですがね、たしかにあの時刻、キイ嬢は僕と一緒にいましたよ。実は彼女がいう寄付申請者とは僕です。」

この件はたぶん、この街じゃ有名なりザドくんあたりの仕業でしょう。いくらシルヴィエ人でも一人でできるものですか。ましてや女性です。ほんとうはわかっていらつしやるくせに、ご冗談を。

いやいや失敬、これは義侠などという奴でもなきや、正義でも殉教でもさらさらい
ませんよ」

人々が怒号し、裁判長がいわんとし、検察官が先んじて怒鳴った。

「君は、なに者だ」

イ多しは意識的に右眉に悲歎のこもった皺を寄せ、唇を愉悦に歪ませる。だれもが狂人だと思ふ。振り向いたキイも瞠目するばかりであつた。

「なに者でもありません。あなた方と同じで、イ多しと申します。海鳥島から来ました。いまは地図から消えたマルシャル大公国の遺民、シルヴィエ聖教徒の暴力がなくば侯爵であつたはずの者です。」

さあさあ、そんなことはどうでもいい、皆さん、素敵じゃありませんか、そこのお嬢さんはこの世の価値を根底から覆されました。思うに僕は彼女に恋しています。

累紗楠嬢が僕を恋するようにね。

おやおや余計なことをいいました。僕のいうことは全部が真実ですが、この上の証拠は持っています。所詮が言葉だけです。被告キイの件に関しては、運良くホテルの従業員が目撃していれば、確認も取れましょうが。

さあさあ、そんなことより刺青を見せてください。

ライアンセルズ

獅子紋ならぬ僕の龍紋を。

とんでもない、死にたがっているではありませんよ」

彼は顔の覆いを剥ぎ取った。

驚きの声が場内を疾風のように過ぎる。群衆の顔が黒っぽい斑点になり、イ多しの逆鱗が玉虫色に延びて、キイの双眸が光の粒に変じ、それら一切が石の膚になる。一抱えもある大きな石だ。石庭であつた。貞観正國寺の枯山水を眺めながら廊下を歩いている。

私は眼を覚ました。いや眠っていたのではない。いったい、なにを観たのであろうか。

二重露出のように二つの現実を体験していた。いま生きている現実と小説世界の現実とを

矛盾なく同時に呼吸していたのである。それらはいわば不即不離だった。ポケットから携帯電話を出す。私はどうしてかあのとき累紗楠に電話せずにはいられなかった。いまでもくはわからない。ただ呼び出し音がもどかかった。出た声は案の定、不快そうだ。

「もしもし。ああ、也節さん。今日は行けなくなったわ」

邪魔なのよといわんばかりに尖った口調の合間合間で、彼女はくすぐられたかのように唐突にいく度か、ふふ、と笑う。背後で男が低く囁く声がした。思い込みの恋を焦がされた。突然激情が私を襲った。私はイ多しだ、それが膚にリアルだった。自分の皮膚が物的に観照され、それがキイイの双眸となって精緻にリアリティを以てイ多しであった。

説明なんかできない。現実問題なのだ。

十分後、イ多しの変死体が発見された奥殿で一晩を過したいから許可が欲しいといったら住職は驚いていたが、私は理屈をならべたてて絶対に必要なのだと結論し、強引な納得を獲た。奥殿は寺社裏の鬱蒼とした森にあり、宝形屋根を雲形斗拱で支え、龍の透かし彫り欄間がある小さなお堂でその場所が建立の遙か以前から聖域とされていたと伝え聞く。蟹代らしきものも残っている。黄昏が冥い厳かな檜の粗参道を逝くのだ。

着くと私は借りた懐中電灯の光で『モスコール民族紛争史』を読み始めた。

途中なんども頭を廻らせた。森は真つ暗で、静かだった。私はイ多しを観た。

天を仰ぐ祈りの合掌のように、焰ほむらのように炎を上げて一条に立ち、闇を照らし、双眼は睜かれ、虚空を射抜いている。一つの鮮やかな真理のようだ。

累紗楠への恋情が彼を烈しく駆っていた。その自裂的な勢いで、イ多しの髪はモスコールのイ多しのように緋となって燃え、火の粉を散らせる。古代森厳の聖地は極限のエクスタシスに格好の舞台だ。芸術的成功も人々の理解も求めず、この場所にだれにも告げずに彼は独りで来た。龍神の刺青が闇の中、蒼燐のように顔に浮かんでいる。

同時にイ多しは火炙りの刑場にいた。いまの私とともに現実の場にいる。『モスコール』からの抜粋が実在している。脱自態エクスターゼだ。

『処刑は城壁から一km離れたメギユグの丘で公開式により執行された。大量の薪が用意され、一本の磔棒が立てられた。処刑場の周囲には丸太で格子状の柵が設営され、民衆やら外国商人やら船乗りやらを仕切る。今朝の早い時間から喧騒状態となっていた。公開死刑は庶民にとってお祭りの見世物と同じなのだ。人々は美しいと噂されるキイイの火炙りを見ようと既に興奮していた。彼女を見ることはまだできない。

刑事や下役人やらが忙しく準備を始めると一部の人々が吼えた。「早くしろおつ」

法務官や警察署副署長や刑務所長や国民会議議員らが席に並び出す。槍歩兵の列が民衆をかき分け、道を造った。併せて仮設刑場を囲み、柵の入口を固める。

吹奏とともに柵外に設けられた壇上に儀装した羅教の司祭が立ち、群衆を見下ろした。人々が静まる。彼が口上を述べ始めた。それが終わると合図をする。

牛イイが繋がれてあらわれた。満場の怒声、喝采、嘲笑、罵声の怒涛。緋色のマントを羽織った法務官が立ち上がり、罪状を読み上げる。終わると右手を上げた。執行のサインだ。梯子を使って棒の頂上近くに、抵抗しない彼女が縛りつけられる。一般大衆らの大歓声が上がった。

蒼穹を背景に牛イイは磔られた。

燃える水が小さなバケツ一杯分撒かれ、点火される。一瞬で爆発のように燃え上がった。群衆の声はさらに烈しく、波浪のようにうねる。煙が丘の上の風のために斜めに流れる。この場所が選ばれるのは煙ですぐに窒息死させないための工夫だった。焼かれても人間はなかなか死ねない。絶命に至るまでは凄まじい場面が繰り広げられることとなる。

炙られ始めはももぞ身を動かすだけだった。それでもかなり熱いのを堪えている。

だが炎が一m強に近づく縛られた手足を引きちぎろうとするかのように上下に激しく悶絶した。髪が縮れる。叫びが上がった。凄絶な表情。炎が彼女の足先に届く。もはや牛イイの動きは常人のものではなかった。意識を失う。だが一瞬だけだ。あまりにも熱いために意識が戻る。その間一秒でもない。意識が戻った途端、弾かれたように身を仰け反らせ、絶叫。凄まじい熱さで意識を喪失。飛び跳ねるように意識を取り戻す。狂叫。これがいく度もいく度も繰り返された。人間の光景ではなかった。

イ多しは衆の中に入る。その存在に気がつき、なにかが起ころのではないかと怖れる人々が退き、自然人垣が割れ、道が開けた。

彼は柵の前まで来る。槍を突きつけられても平然としていた。彼の人を見上げ、爆裂の嗤笑をする。砕け散るシンバルの響きのような嗤笑をする。

牛イイの着物一片が火の粉となって胡蝶のように舞いながらスローモーションでイ多しの顔に落ちかかろうとする。彼は右手で払った。僕は叫ぶぜ、イ多しが私を観ながらつぶやく。叫んだ。

「ほうら苦しみには勝てない。民衆よ、彼女は苦しんでいる、これが現実だ」

人々はその真意を理解しなかった。一瞬、静寂となる。むろん、真意などない。彼は叩き込むように叫び続けた。

「肉体の苦痛に人間は勝てない。絶望だ。僕ら細胞の塊でしかない。

不死を宣言した釈迦は、死の苦しみで斃れ、喉の渴きを訴え、樹下に臥して弟子アーナ
ンダに水を乞うた。しかし彼は不死だった。ああ、どうして解脱した者が永世をこいねが希うもの
か。

あるのはただ、現実だけだ。なに者でもない現実だ。非情の、乾いた事実だ。無よりも
無である、ただ現実でしかない現実だ。

エクスターゼ
これが脱自態だ」

数人の刑吏がイ多しを押さえつける。彼は私をじつと眺め、いった。「そして僕は把握
を免れようと身も裂くように暴れ、破れながら翔けり躍るように叫び続けるんだ」 そし
て憂うように微笑んだ。

実際、イ多しは叫び続けた。私の喉が裂けそうなくらいに干乾びる。丘の上の刑場での
これら凄惨な出来事がリアルになればなるほどに、ここが未明の奥殿であることを鮮烈に
していた。

エクスターゼ
「脱自態さ。だめだ、受諾できない。堪えられっこない、だからエクスターゼなんだ。い
やだっ、助けてくれ。やめてくれ。

見よ、諸君。現実だ、ただ苦しんでいるだけだ、ただ無慈悲に苦しめられている女がい
るだけだ、だれにも受諾させない。

エクスターゼ
脱自態だ！」

炎が磔の尖まで上がった。

牛イイの踵の肉が焼かれ、骨が露わになる。着物は焦げ縮れたぼろ屑となり、髪はない
も同然。もがき方も猛烈で、既に正気ではなくなっていた』

彼の死は心不全とされている。よくわからぬ死因を心不全と判じる場合があるのだ。奥
殿の前で斃れていた屍骸の右手には火傷の跡があったらしい。ちなみに火炙りとされて死
す者の最終的な死因は心不全だという。

曙光が差した。

私にとっての現実である夜が明ける。黒い森に蔽われていた峯が赫奕とした。すなわち
なに^もことも起こらなかったのである。あたりまえだ。それがエクスターゼではないか。リ
アリティだ。

吐息した。

それから幾日か後、私はようやく悲鞘家の承諾を得て墓参が許された。精密時計でも組

み上げるかのように巧緻に日を選び、装いを糺して出かける。

真神線から眺める水田に蒼穹が映え、よく晴れた穏やかな日だった。眼の前にするその墓石はごく平凡で、普通の人と変わらない。

私は戒名を見遣る。なんとか居士という、イ多しになんら縁のない、ぶざまな文字の綴りを見ていると晰らかにいまでも彼は生きているのだと確信した。

私は個人的にイ多しの死は無為だったと思う。つまり渴いた人の喉を潤す水のようなであった。

持参した彼の著書を囊から出し、ページを開こうとした刹那、押し花の如くイ多しが紋となって平たく挟まれているのではと想いが浮かび、いくときかためらう。

空元